

# 山田

Yamada

## 1

chapter 1

津波が襲った後に住宅街から上がった火は  
またたく間に燃え広がった  
(3月11日午後5時42分撮影)



### 凡例

- 本書には、
- 1 「山田町東日本大震災を記録する会」が主に平成25（2013）年1月～26年3月に公募した手記
  - 2 同会の呼び掛けで26年1月に山田中学校、山田高校の生徒から提出された作文
  - 3 山田町婦人団体協議会発行の文集「明日へ向かって」第1集（25年3月）、同第2集（同年10月）に掲載された手記
  - 4 田の浜婦人会・船越湾漁協田の浜地区女性部が26年3月に発行した文集「忘れない・そして前へ」に掲載の手記
  - 5 町内の小中学校の児童・生徒による優秀な作文を集めた「やまだの作文」第40集（24年2月）に掲載された作文
  - 6 岩手県警察の警察官らによる震災手記集「使命 証言・岩手県警察の3・11」（25年10月、岩手日報社刊）

の中から選んだ108編のほか、平成24年度「甦れ日本！高校生アスリート作文コンテスト」（公益財団法人全国高等学校校体育連盟主催）の本町出身者の入選作1編を収録した。

執筆者の敬称は略し、年齢や学年は手記の提出時期やそれぞれの媒体などに発表された当時のものを記した。**3****4****5****6**の手記については各文の末尾に出典を示した。

また、山田町出身で地理学が専門の小岩清水氏（サイエンス・ポランティア）による特別寄稿を掲載し、地理学の観点から過去に町を襲った津波の実態を分析、先人の教訓を伝えることにした。

※町内各地区の死者・行方不明者は、当時住民票のあった方々と本町に居住していた外国人1人。  
※被災家屋の割合は一部損壊を含む。



# 生きていた譲り合いの心

〔山田〕 1

山田中学校1年「当時・山田南小学校4年」佐々木深音<sup>みお</sup>

あの日から私たちの生活は一変しました。たくさんの建物が流され、たくさんの尊い命が奪われました。

あの日は、学校で6時間目の授業を受けていました。なんの変化もない日々を過ごしていました。そして午後2時46分、聞いたこともない地鳴りと共に、体感したこともない地震が起こったのです。私は、何が起こったのか状況が理解できず、ただ机の下にもぐって揺れがおさまるのを待つばかりでした。1分くらい経っても揺れはおさまらず、校庭に避難しました。中には泣く人もいました。少し経つと、地元の方も避難してきました。そして、保護者の方たちが子供たちを迎えにきました。

余震が続く最中、私は何も考えられませんでした。これからどうなるのだろうか。家族は生きていけるだろうか。家はどうなっているだろうか。ただ先生の指示を待ち、頭が空っぽでした。やっとお母さんが迎えに来ました。しばらく校庭にいましたが、町の様子が気になり、車を止めていた学校の下の方付近の駐車場に行きました。長崎街道に出ると、目の前の光景に思わず目をおおいたくなりました。いつもの街並みが崩れ落ち、がれきの山ができ、至る所で火の手が上

がっています。昨日まで当たり前にそこにあつた駅や公園やお店が、跡形もなくなっていました。その夜は、あまりの恐怖に呼吸ができなくなり、病院に入院しました。ベッドの空気がなく、院内は人であふれていましたが、私に長いすをゆずってくれた人がいたのです。自分のことだけで精いっぱいな時でも、他人に対してゆずりあいの精神が病院のあちこちで、息づいていました。あの震災で、私はいろんなことを学びました。失ったものばかりではないのだな、と気がきました。震災から学んだことを教訓に、風化させないようにしていきたいと強く思います。

## 復興することが恩返しに

〔山田〕 2

山田中学校1年「当時・山田南小学校4年」堀合 泉

大きな地鳴りと激しい揺れが起こりました。あまりにも揺れは大きく、机やいす、体全体が建物と同じように左右に動きました。東日本大震災です。町は大きく変わり、辺りは一面焼け野原でした。店もなくなり、買い物など今まで普通にしていたことができなくなりました。たくさんがれきのために、歩く所がありませんでした。今まで暮らしていた、大好きだった山田がたった一日で豹変してしまいました。

あれから、もう少しで3年です。町は活気にあふれています。震災でなくなった店や、できな

くなっていた漁など、一時止まった時間が動き始めました。しかし、復興の力になっっているのは、山田の人たちだけではありません。私たちを元気づけようと、はるばる来てくださったアーティストのみなさん、住宅再建や土地のかさ上げのために来た工事事務所のみなさん、寄せられた募金などの資金、国内外のさまざまな支援に支えられてここまでできました。いくら震災で大変だからといって、被災者だからといって、何もしいないのは、支えてくれた方たちに失礼です。そこで私は、どのようにすれば感謝の気持ち伝えられるか考えてみました。

答えは一つ。復興することです。寄せられた応援に答えることができるのは、私たちだけなのです。

これからも、いろいろな方たちに支えてもらおうと思います。感謝しながら、私たちは立ち上がっていかねばなりません。この、真っ白になってしまった町に、山田町の人たちで、それぞれが思い描く山田を造りあげていきたいです。それは、私たちにしかできないことなのです。

## 深く傷ついた心

〔山田〕 3

山田中学校1年〔当時・山田北小学校4年〕 堀合琴乃

千年に一度といわれる大きな津波が来たあの日から、全てが変わってしまった。

初めは何とも思っていなかった地震。だけど、その時の地震は違った。教室のロッカーから教科書が落ち、机の上からも教科書、筆記用具が周りに転がった。しばらくして地震がおさまると、みんなで校舎裏に行った。私は怖くて泣いていた。他の人も泣いていた。しばらくすると祖母が自転車に乗って来てくれた。とても安心した。学校から家に向かう途中、不審な音がして、私と祖母はふり返った。川が逆流して来るのが見えた。町が波にのみ込まれていくのが祖母には見えたという。

家に帰り、急いで荷物をまとめた。棚に飾ってあった小物類は落ち、ガラスの破片もあった。私はとても不安だった。母が仕事に出かけていたからだ。携帯電話もつながらなかった。泣きそうになっていたところに母が帰ってきて、私は泣いた。安心した。しかし怖かった。幸い、家までは津波は来なかったが、家の前にある畑の所まで水が来ていたらしい。

日が暮れてきたころ、通っている学校のすぐ近くに住んでいるいとこたちが来た。話を聞かなくとも、彼らの様子から津波の被害にあったことが分かった。夜はポットにあったお湯を使っ

て、レトルト食品をみんなで食べた。ろうそくの火がいつもの照明代わり。みんな黙っていた。

それからは忙しく、大変な日が続いた。地震で散らかった部屋の掃除をしたり、役場の方へ物資をもらいに私といこの2人で行ったりした。夜は発電機とろうそくを使って過ごした。学校にはしばらく行くことはできなかった。時々起きる地震のたびに私は怖くなった。いつもの地震の怖さとは違い、3月11日の事を思い出してしまう、恐怖の対象だった。

今でも地震を感じたり、緊急地震速報を聞いたりするたび、恐怖をおぼえ、あの日の事がよみがえる。それほど私の心には大きな傷ができた。被災者はもちろん、町にも大きな爪痕を残していった東日本大震災。忘れたくても忘れられない。多くの犠牲者や被害を出さないように、あの日の事を忘れず、語り継いでいくべきだと私は考えている。

## できることを精いっぱいやった

〔山田〕 4

山田中学校1年「当時・山田南小学校4年」 山崎美来<sup>みく</sup>

あの日、私は学校で当たり前に授業を受けていた。算数の授業。ごく普通に先生の声が教室に響き、話を聞いていた。するとその時、今まで感じたことのない地震が起こった。私は特に焦っていなかった。先生も周りの子も落ち着いていた。先生が地震情報を見ようとテレビをつけた

時、テレビは消えた。停電だ。

地震がおさまり、「校庭に逃げなさい」という放送で私たちはすぐ外に出た。家族が来るのを待った。津波なんて来るわけないでしょ。私は軽い気持ちだった。そんな時、先生が携帯を取り出して「津波だ。釜石に津波が来ている」と言った。他の先生や生徒が携帯の映像を見に集まっていた。「えっ、本当なの」。そう私は思った。津波のことをようやく信じた。

だんだん怖くなってきた。周りの友達のお母さんや親は迎えに来る。なのに私の親は迎えに来ない。もしかして来ないんじゃないか……。すぐく焦った。すると見慣れた人が来た。お母さんだった。その瞬間、とても安心した。

私は家に帰った。電気はつかない。水も飲めない。テーブルにろうそくを1本立てた。ごはんは小さいおにぎりとお茶だけ。家にいるのも嫌だった。この家も燃えるんじゃないか。「お母さん、学校に避難しよう」。そう言っても「大丈夫だよ」と受け入れようとしなかった。不安な一夜を明かしたが、家は焼けなかったし大丈夫だった。

しかし、大変なのはここからだ。電気は使えないし水も使えない。私は毎日山の水をくみに行くなど、できることを精いっぱいがんばった。夜はいつもこたつにろうそくを1本立て、少し話をした後、7時ぐらいにはもうこたつの中で寝ていた。早すぎて全然眠くならなかった。「やることがないんだし、寝た方がいい。早く寝れば早く明日になるよ」。毎日のようにお母さんはこう話していた。

やがて電気もつき、水も出るようになった。いくら前よりは楽になった。でも食べ物がない。私はお姉ちゃんと毎日支援物資をもらいに行った。たくさんの食べ物をリュックに詰め込んで、重い荷物を背負いながら家に帰る。リュックが破けたこともあった。それでも家の役に立っているかもしれないと思うとうれしかった。

そんなことも今では昔の話。今は電気も水も当たり前に使える。食べ物もある。しかし物を大切にしなければいけないと思う。津波なんて来ないと、勝手に決めつけてはいけない。まず落착くまでは避難所にいるべきだと思う。今回の体験を今後に生かしたい。一つ一つの物、人に感謝したい。あの日のことを絶対に忘れてはいけない。

## 祖母と親友を失って

〔山田〕 5

山田中学校2年「当時・山田北小学校5年」大河原陽花<sup>ひな</sup>

あの日、私は普段と変わらず、登校の準備をしていました。玄関から見えるおじいちゃんとおばあちゃんの姿。いつもは、玄関から2人に「行ってきます」と言ってから家を出ていました。でも、この日は友達との待ち合わせの時間に遅れそうで急いでいたので、私はあいさつを返さないうで家を出てしまいました。

学校に着いてからもいつもと変わらず友達と遊び、1日が終わるはずでした。5時間目。いきなり教室が揺れて、みんなで机の下に潜りました。怖くて、隣の席の親友と手を握り合って揺れが小さくなるのを待ちました。そして全校のみんなで高台へ避難しました。高台にいても大きな揺れは続き、地響きまでしていました。泣いている子や、震えている子もいました。私は親友の手をずっと握っていました。

しばらくたつと、みんなの親が迎えに来て、次々と帰っていきました。私と親友にも迎えが来たので、帰りました。高台にある駐車場に車を止めて、お母さんが荷物を取って来ると言って家へ戻っていきました。車の中は私1人です。しばらくたつても家族のみんなは戻って来ず、心配になって車の外へ出ました。そこで私が見たのは、町が泥水に沈んでいる光景でした。何が起きたのか分からず、私はただその場に立っていることしかできませんでした。周りの人たちもみんな泣いていました。

水が引くと屋根からお父さんの姿が見え、「そこにいろよ」と言っって手を振ってくれました。私は安心して家族5人がそろうのを待ちました。少したつて、お母さん、おじいちゃん、お父さん、とみんなが来ました。でも、おばあちゃんが来ません。お母さんに聞いても、お母さんは何も答えてくれませんでした。4人で車に乗り、車を走らせました。どこをどう走ったのかは覚えていません。次の日、私たちはお母さんの実家に行き、そこに泊めてもらうことにしました。その日は、家へは行きませんでした。その次の日から私たちは家へ行き、家の片づけをしました。

1階の部屋に人がいました。おばあちゃんが亡くなっていました。大好きだったおばあちゃん。すごく悲しくて、涙が止まりませんでした。

3月下旬、お母さんの携帯に担任の先生から電話がありました。悲しい知らせでした。親友が亡くなってしまったのです。大事な人を2人も失って、もうどうすればよいか分かりませんでした。

津波から約3年。町も少しずつ元に戻ってきて、みんなが楽しく過ごせる山田町になりました。震災を体験した私たちだからこそ分かる、家族・友達の大切さ。いつまでもその事を忘れず、みんながずっと幸せに暮らせたいと思います。

## 父の死を乗り越えて

〔山田〕 6

山田中学校2年「当時・山田北小学校5年」 川村大喜

あの日、小学5年生だった僕は、いつも通りに登校していた。ちょうど僕の誕生日で、少しテンションが高かった。でも、そんな気持ちが一転した。午後2時46分、突然の出来事だった。大きな揺れが起こり、僕たちは机の下に隠れた。揺れがおさまってから、学校裏の避難場所に逃げた。移動して間もなく、波が押し寄せてきた。安全な場所で状況を見に行ったら、信じられない

光景が広がっていた。次々とのみ込まれていく家や街を見て、夢じゃないかと思う自分がいた。急に家族が心配になった。中には泣き叫ぶ人もいた。僕たちは、みんなの無事を祈ることしかできなかった。津波がおさまり、一晩泊まることになって、体育館に向かった。遠くの方を見ると、オレンジ色に光っていて、大きな爆発音も聞こえてきた。火事だった。すごく大きな被害で、心配は積もるばかりだった。体育館は電気もつかず、トイレも遠く、寒く、お腹も空いて、すごく気持ちが落ち込んだ。味わったことのない体験だった。そんな時、温かいおにぎりやサバの缶詰が届いた。日々、普通に食べている物だけど、すごくおいしく感じた。食事をするこの大切さが身に染み込んだ。

まともに寝ることもできずに、次の日の朝、避難所へ向かった。深刻な気持ちのまま、そこで家族の帰りを待ち続けた。友達のお母さんがだんだんと帰ってきていた。でも、僕の母はまだ来ない。心配していると、やっと母の顔が見えた。安心した。姉2人も祖母も無事だった。でも、父の行方がまだ分からなかった。探しに行っても、見つからなかった。

僕たち姉弟は、いとこのいる秋田に行くことになった。母は残った。何日かたったある日、父が見つかったことを聞いた。父は帰らぬ人となってしまった。すごく悲しかった。立ち直れないくらいの気持ちだった。でも、乗り越えるしかなかった。帰る家もなくなり、避難所生活が続いた。避難所の人たちと助け合い、協力し合って暮らした。

あの時のことは、今でも一生忘れられない。悪いことばかりだったけれど、普段の生活で気付

かなかったことに気付いたり、大切なことを学べたりした。あの時の記憶は、大切にしていきたい。

## 生きる喜びを知った

〔山田〕

7

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」木下 葵

あの日、私は小学校にいました。校庭に避難し、母が車で迎えに来てくれました。家では父が仕事をしているはずなので、父と一緒に山田中学校へ逃げようと母は考えました。そして、海がすぐそばの家へ戻りました。いつも家へ帰る道なのに、その日はおかしなことがたくさんありました。私は何となく嫌な感じがしました。

家に着き、母が家へ入ると同時に、波がすぐそばまで来ました。高い波でした。私はすぐに車内にいる弟の手をとり、母と3人で3階に上がりました。心臓はドキドキして涙が出ました。家がバキバキと音を立てて3階だけが残り残りました。勢いよく波が家にぶつかり、家ごと流されました。私は夢なのか、現実なのか分からなくなり、死んだのかな、とも思いました。本当に一瞬の出来事でした。

少し時間がたち窓の外を見ると、がれきがたくさんあり、道路が見えません。私たち3人はがれきの上を歩きました。途中、名前を呼んで泣き叫ぶ人や、ただ黙然としている人を見ました。私たちは親せきの家にとどまることにしました。母は疲れきった顔をし、弟は寝ていました。母は「ごめんね」と何回も私に謝りました。ふと気づくと、家族のことが心配になってきました。今思うと自分たちが生きるということに必死だったのでしよう。

祖父が来ました。なぜここにいると分かったのかはいまだに不思議です。再会を喜びどこかへ出かけました。さすが「木下家のスパーおじいちゃん」だと思いました。夕方の少し暗くなった時、突然、父が現れました。涙があふれるくらいうれしかったです。今までの事を話すと父は泣きました。私は初めて父が流す涙を見ました。それからは役場にいるいとこと合流し、関口にある倉庫へ歩いていきました。

3月12日になり、朝、外に出てみるとこげ臭かったです。倉庫の掃除をし、14人（知らない方を合わせて）で暮らしました。知らない方も受け入れられる私の家族はすごいと思い、感動しました。

私は小さいとこたちの面倒を見る日々が続きました。水をくみに行った時、チョコをもらってうれしかったことを覚えています。みんなでトランプも作りました。

私は震災にあってから、人の優しさを知ることができました。困ったときには誰かが支える。そんな心がこの先も続いていってほしいです。そのために私たちは、今は苦しいかもしれませんが、優しい心を持ち、山田町と共に精いっぱい、生きていくしかないのです。震災を経験した私

たちにしか分からないこと。それは、生きていることの喜びです。

## 友達の遺志継ぐ

〔山田〕 8

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」 小林優太

その日は悪い事は起こらないはずだった。あの地震さえなければ。

その時、僕たちは体育の授業で体育館にいた。地震が起こるとは全員が考えていなかっただろう。地響きと共に地面が大きく揺れ始めた。天井の照明が今にも落ちてきそうならいだった。僕たちは危険だと判断し、やっとのことで非常口から校庭へ逃げる事ができた。初めてとても大きい恐怖を感じた。身震いが少しの間止まらなかった。その時はみんな両親の事を考えていただろう。

親と合流することができ、車で夜を過ごした。街からの爆音で寝ることがあまりできなかった。それから限られた食料での避難所生活が始まった。避難所は狭くて寒く、暖房をつけてもあまり暖かくはならなかった。10日ぐらい過ぎたところに、親戚の家に行くことにした。道中で見たのは、がれきだらけの街並みだった。親戚の家での生活は避難所よりはましだったが、電気が使えないのが不便だった。

4月になり、自分の家へ帰ってみると、目の前まで津波が来た跡があった。家に入ると、全ての物が落ちたり倒れたりしていて、地震の強さを物語っていた。学校に行ってみると、少し少ない人もいたが、クラスメートが教室に集まっていた。そこで友達が津波に流されて亡くなったという話を聞いた。最初は信じられなかった。だが本当の話だった。その人は震災の日は病気で家にいたらしく、逃げることもできなかったらしい。

次の登校日、図書室で追悼式が行われた。泣いている人が多かった。その時に僕は思った。僕たちが亡くなった人の遺志を継いでいかなければいけない、と。その人の分まで生きなければ、と。あの日から約3年がたとうとしている。あの震災の事を後の世代へと伝えることが、震災を経験した僕たちの役目なのだ。

## 「当たり前」の幸せ

〔山田〕 9

山田中学校2年「当時・山田北小学校5年」 齋藤南海<sup>みなみ</sup>

あの日、誰もが想像していなかった大きな地震があり、津波が山田町に押し寄せてきた。東日本大震災。たくさんさんの命が奪われ、絶望しか感じない日々が続く、不安だった。

私はいつも通り学校に通い、いつも通りの生活を送っていた。しかし、授業中、大きな揺れが

おそった。先生方に連れられて急いで学校裏に向かい、それぞれの親が迎えに来るのをひたすら待った。しばらくして私の親が来て山の上に逃げた。必死に上へ上へ、ただひたすらに上を目指して走った。何かが倒れていくようなすごく大きな音がした。その方向を見てみると、たくさんの家、電柱、木々が砂ぼこりを立てながらくずれさっていった。黒ずんだ汚い波がどンドン町をのみ込んでいき、私の家の方へ近づいて来るのを見た。怖いという感情は全くなく、ただぼう然とながめているだけだった。

それから私は、宮古のおばあちゃんの家に避難した。部屋の中は真っ暗で寒くて、ただ不安で明日がどうなるかも分からずそのまま眠りについた。次の日、目が覚めると当たり前がおばあちゃんの家だった。多分私は、心のどこかで夢だと思い込みたかったのだ。自分の家が、町がなくなつたという事実はあまりにもショックで信じたくなかった。しばらく私たちはおばあちゃんの家に住んでいた。その間、誰とも連絡も取れず、山田がどうなっているかも分からない毎日を送った。そんな時、母から「Aちゃんが行方不明だつて」と聞かされた。初めは「何、冗談言ってるの」と思ったが、後からこの子が見つかったと聞いた。すごく、すごく悲しかった。だが私は家族の前では絶対泣かなかつた。というより泣けなかつたのだ。家族のみんなが泣く姿を一度も見ることがなかつたからだ。私は夜、みんなが寝た後、一人で泣いていた。そんな夜がずっと続いた。

友達や家をなくした悲しみを抱えながら学校が始まった。最初は山田にいることもつらかったが、友達の笑顔を見られるようになり、安心したし、幸せだと思えるようになった。この小さな幸せを感じた時、私は今まで当たり前だった事が幸せな事なんだと気づかされた。

当たり前前にできていた事ができなくなる怖さ、悲しみ、つらさ、これに気づいた時にはもう、大切な物を失っていた。誰もがそうだったと思う。だから私は、この経験があったことで、壁を乗り越える強さ、思いやり、本当の幸せに気づけたのだと思う。つらくて苦しい体験が私たちを成長させてくれたのだ。

この経験を忘れず、今の生活が幸せだということを心にとめておいてほしい。今を大切に、精いっぱい生きてほしい。

## 友達の分まで生きる

〔山田〕

10

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」佐々木**緋毬**ひまり

ゴーツという地鳴りが響き、その直後大きな揺れが私達を襲った。午後2時46分。私はあの時を忘れない。

当時私は、小学5年生だった。いつものように授業を受けていた時、その悲劇は起こった。あんな事が起こるなんて誰も想像をしていなかっただろう。

地震がおさまった時、全校生徒はみんな学校の後ろの高台に避難した。そこには、町から避難してきた数人の人たちがいた。避難訓練は何回か経験していたが、本当の避難というものは初めてで、避難してきた人たちを見るのも初めてだった。自分が過去に経験してきていないものになり、少し恐かった。

そのうち、保護者が迎えに来た生徒は帰れることとなり次々と下校していった。私の親も迎えに来たので私は5年生みんなに「またね」と言った。その言葉が、クラス15人で話す最後の言葉になるとは思わなかった。

家に帰ると母がいた。その姿を見てなぜか涙が流れた。その日から大変な生活が始まった。

水は自転車ですくまで行き、くんできて、食料は救済物資と冷蔵庫にあったものだけとなった。ある日、私といと物が物資をもらいに並んでいると、テレビの取材が来た。私たちはインタビューされ、「今、欲しいものは何ですか」という質問に答えることができなかった。欲しいものがありすぎたからだ。どんなに考えても答えが出ない。店も流され、得られる食料といえれば救済物資しかなかった今、何を言えたいのだろうか。言ったところで本当に来るのだろうか。

生活もやつと落ち着いてきたころ、友達の死が告げられた。私を児童会に誘ってくれて、ピアノと一緒に弾き合った仲だった。

あの日からもうすぐ3年がたとうとしている。私は今でも友達の死が信じられない。まだどこかで生きているのではないかと思ってしまう。ピアノを弾いても部活をしても、友達の

存在を近くに感じ、クラスメイト全員が友達の分まで強く生きる。これこそ私たちが今できるとだと思ふ。

そして、どこかで見守ってくれていると信じることによって、被災者は犠牲者の思いと共に生きられる。

## 語り継ぐ大切さ

〔山田〕

11

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」澤田拓真

僕はこの先、何十年生きていくのだろうか。その間、様々な経験をするだろう。楽しいこと、つらいことや悲しいことも経験するだろう。

しかし、東日本大震災で経験したことは、生涯忘れられない出来事だろうと確信する。

変わり果てた山田町を目のあたりにしたのは震災発生3日後であった。大好きな町が悲惨な状態になってしまった、という事実をどう僕に知らせたらよいかと家族は悩んだようだ。しかし、大人たちの表情や会話から、僕はこの町が尋常な状況ではないことを理解していた。

母に連れられて高台から町を見ると、そこには信じられない世界が広がっていた。僕の記憶にあった町ではなかった。覚悟はしていたが衝撃を受けた。ぼうぜんとしてみると、母の知人が声

をかけたきた。お互いの無事を喜び、それと同時に悲しい知らせも聞かされた。

悔しかった、悲しかった。どこに怒りをぶつけたら良いかわからずに自分自身の心のやり場がわからなかった。

地震も津波も自然災害だから――。しかし、おそらくこの災害を経験した人々みんながそうは割りきれない気持ちでいただろう。

人間は自然と共存してきた。その関係はずっと続いていくだろう。しかし、自然は時として荒れ狂い、人間を苦しめる。いつかまた、災害はやってくるだろう。そのことを僕たちは忘れてはならない。

この東日本大震災での経験を後世に伝え、減災に努めるにはどうしたらよいのだろうか、もう二度とあのような悲しみが起きないようにするにはどうしたらよいのだろうか。語り継ぐこと。そのことが大切ではないかと僕は思う。

僕は戦争を経験していない。だが、戦争の悲惨さは理解しており、戦争を起こさないためには世の中の人間が助け合い、争いを避けるべきであることを理解している。戦争については本を読んだり、テレビを見たり、戦争経験者の話を聞いたりすることで戦争について考える機会を得たからだ。

今回の震災について、震災を経験していない人々や後世に語り継ぐことは、自然災害や減災に對して考える機会になるのではないか。

人間は知恵ある生き物であり、それによって進歩してきた。自然災害に負けない知恵を持って生きていきたい。そう思った。

## 妹との再会願ひ

〔山田〕

12

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」 山根大弥だいや

3月11日午後2時46分、誰も予期せぬ未曾有の大震災が発生した。

僕は、学校にいて校庭に避難していた。友達とふざけながら、僕は「大丈夫、またいつも通りに過ごせる」と思い込んでいた。寒くなってきたので近くの保育園の中に入り、迎えが来るのを待っていた。迎えはなかなか来なかった。そんな時、外からボン、ボンと爆発音が聞えてきた。不思議に思っ外に出てみると、燃え上がる炎が目飛びこんできた。僕は、地震の揺れを思い出したり、炎を見たりして不安がこみ上げ、泣いてしまった。しばらくたって自分をだますように「大丈夫、大丈夫」と言い聞かせて涙をぬぐい、その日は就寝した。

次の日になり先生に起こされ、親が迎えに来てくれたと聞き、一安心していた。たった1日ではあったが、すごく久しぶりのような感じだった。僕は、真っ先に妹のことを聞いた。親の顔がみるみる暗くなり「流された」と言った。僕はその言葉が信じられず、「冗談だよ」と何回も

聞いたが反応がなかった。しばらく歩くと親の友人に出会い、妹のことを聞かれると親が泣き出した。これでようやく「本当だったのか」と気づき、涙があふれてきて止まらなかつた。

しばらくして涙も止まり、祖父母のいる避難所に向かって歩き出した。町は見渡す限り、津波で押し寄せたがれきでいっぱいだった。僕は、あ然としてしまった。それでも立ち止まらず避難所に向かった。途中、自分の家の辺りを見た。昨日見えた炎のせいで、トタン屋根以外は全てが灰になっていた。妹が流されたのは家の中だと聞いていた。今すぐにでも探したかったが、危険だったので近づくことすらできず、離れた場所から無言のまま見続けていた。避難所では祖父母との再会を喜び、全員で親戚の家に泊めてもらうことになった。

あれから3年がたち、今は仮設に住んでいる。以前住んでいた所は、がれきも撤去されてもう何もない。妹はいまだに見つかっていない。妹とはあの日を境に会えないが、また会える日を願う、僕は今日もしっかりと生きていく。

## 平和だった当たり前の日々

〔山田〕

13

山田高校2年〔当時・山田中学校2年〕 阿部祥子

あの日、私は中学校にいました。教室にいと、あの揺れが来ました。本当に、本当に途方もなく大きな地震でした。学校の天井が崩れる、と思いました。そんなことにはならなかつたけれど、自分は確実にここで死ぬんだとすら思いました。生まれて初めて死を覚悟しました。でも、私は死にませんでした。

体育館に避難し、ここでは皆それぞれ、不安そうだったり、楽しそうに談笑したり、泣いていたり、ふざけていたりといろいろでした。家や車が無事な家庭では、その日のうちに学校に子供を迎えに来ました。どんどん人は少なくなっていきました。高校の体育館に移ると、生徒はもっと少なくなりました。その心細さ、寂しさは本当にうまく表現できません。自分の親は迎えに来ないし、親しくしゃべれる友達はみんななくなっていたし、そこにいる間は毎日泣いていました。絶対に生きていくはずだと自分を励ましましたが、何の情報もないので、じっとしているだけでした。今もその時のことを思い出すと、すごく嫌な感じがします。

津波に襲われた町を見たのは、震災発生後、数日たってからでした。思わず涙が出てしまいました。ぼうぜんとなりました。何もなくなつたというか、がれきしかない町を見るのは不思議な気持ちでした。やたらと風が強く吹いていたのを覚えています。家族と無事に再会できた時は、泣くつもりなんて全くなかつたのに、思いつきり泣いてしまいました。家族と自分が生きていて、心の底から良かったと思います。

被災後の体験で印象に残っていることはたくさんありますが、中でも遺体安置所に行ったことはしっかりと覚えています。津波が来なければ、そこに行くことはなかつたのに、不思議な気分

す。親族のおばさんの遺体を確認しに行きました。私はそこで、人が死ぬということを実感しました。安置所の外はかすかに嫌な臭いがして、それが私を怖いと感じさせました。中に入るとひやりと涼しくて無臭でした。一面に並ぶブルーシート、白い仕切りをはさんで、その奥は薄暗くてよく見えませんでした。怖かった。

どんなに時間が過ぎてても、震災のことはよく覚えています。本当に昨日のこのように思い出すことができます。多分、数年後でも数十年後でも、思い出すことができるでしょう。そう考えると、震災後から時間が進んでいないような、奇妙な気持ちに襲われたりもします。

自宅にいる時、ふと「震災前はこういうふうに住んでいたんだろう？」と思うことがあります。でも、具体的には思い浮かばなくて妙だなと思います。思い出せないほどに、平和で当たり前すぎる日々だったんだと思うと切なくなります。私はそれでも、今は自宅でのうのうと暮らして、家族も生きています。家も失って、家族がみんななくなってしまった人がいます。それ以上につらいことはないと思います。私はとても幸運でしたし、今も幸せな状態なのだと思います。

何もかも失った人も、そうではない人も、同じこの町に住んでいるという意識と、震災の教訓を生かして、助け合っていけたらいいなと思います。忘れたいつらい経験もあるけれども、忘れなければいいなと思います。

## 全てが変わった日

〔山田〕

14

山田高校3年〔当時・山田中学校3年〕 山崎庸子

あの日を境に私の知る山田町は姿を消しました。今まで生きてきた中で、これほど鮮明に記憶に残った事はありませんでした。

当時私は中学3年生で、その日はホームルームが終わり、教室で帰りの準備をしていました。クラスメートと共に階段を下りている時、地震が発生しました。かなり大きいなと感じつつも、すぐ収まるだろうと思っていましたが、先生が大声で「急いで机の下に入れ！」と叫びながら教室を見回りに来たのを見て、何やら大ごとだなと思いながら机の下に入りました。揺れが収まると、学校に残っていた生徒は校庭に集められました。下校時間から地震の発生まであまり時間が経過していなかったのです。下校途中だった生徒が一人、二人と学校に引き返して来ました。私は友人と「きつと今日のニュースで取り上げられるだろう」などと話をしていました。地震発生直後は楽観的な考えだったのです。

しかし、そのしばらく後、普段聞こえるはずもない波の音が海の方から聞こえてきました。津波が発生したのです。数人の先生が確認し、生徒は体育館の中で過ごすことになりましたが、パニックで過呼吸になる生徒が何人もいました。それから一日中余震が続きました。最初のうち

は、図らずも学校に泊まる形になったことで、生徒たちは元気がありました。ラジオや学校に戻って来た人たちから告げられる情報を聞くたびに体育館の中は静かになっていきました。

学校には住民の方々が次々と避難して来ました。学校中の暖房器具や、少しでも寒さをしのげるようにカーテンやタオルなどをかき集め、名簿などを作成しているうちに、あつという間に夜になっていました。町で火事が起こったようで、体育館の窓から空がオレンジ色になっているのが見えました。中学校にも飛び火する危険があるということで山田高校に避難することになりました。時計は地震発生時のまま止まり、時間は分かりませんでした。外は真つ暗で、3月といても雪が残っていたので高校に着くまでがとて長く感じ、怖かったです。体育館に着いた後、就寝時間となりましたが、寒さと緊張のためか一睡もできませんでした。

翌日、1人1個のおにぎりと1グループに1缶ずつキャンパンが配給されました。それをもたらした時、普段当たり前のように毎日食事が取れているということがありがたいことなんだなと思いました。前日の夜は何も食べる物がありませんでした。親が迎えに来ないと帰れないということだったので、町はどうなったのだろう、などと考えながら待っていました。午後になって親が来て、ようやく学校から出ることができました。外に出て、私は言葉を失いました。前日まで普通に見ていた町が、見渡す限りがれきの山になっていました。通学路が通れない状態になっていたので、車1台通るのがやつとの山道をたどって何とか帰宅することができました。家は停電しており、ラジオで情報を得るだけで、町の様子をニュースで見ることができませんでした。

震災からしばらくたって初めて、自分の目で町中を見た時はショックでした。町のほとんどががれきに埋もれ、駅の近くには津波によりどこからか流されてきた大きなタンクが横たわっていました。教科書でしか見たことはないけれど、終戦後の町みたいだなと感じました。あれから3年がたとうとしている今、町の復興もだんだんと進んできました。今までの山田町とは町並みがかなり変わってしまったけれど、また新しい山田町ができていくように願っています。町が再建された後に今回のような震災が起こっても、一人の犠牲者も出ないようになってほしいです。

## 少しでも復興を手伝いたい

〔山田〕

15

### 山田南小学校5年 佐々木美結<sup>みく</sup>

わたしたち5年生は、震災後の山田が、どのようにして復興に向けて歩みを進めているのかを調べ、そのことをもとに学習発表会のげきを作りました。震災に関わったげきをすると聞いて、震災があってもがんばっている人たちをえんじたかったので、げきの完成が楽しみでした。

山田の復興について調べ、学習を進めていくと、被害は大きかったけど復興の計画が少しずつでも進んでいて、少し安心しました。はじめに役場の方が来てくださって、山田の被災の様子や今後の山田の復興計画について聞くことができました。取材に行った場所は、スーパーの「びは

ん」・魚市場・むしやきカキが食べられる「かき小屋」(みんなは行けないので先生だけ行きまし  
た)・なかよし商店街と、どの場所もわたしたちの町にとでもなじみのある場所です。

役場の方の話では、被害額が大きすぎて、すぐおどろきました。200億円とあまりにも  
大きく、逆にピンとこないくらいでした。たかさんの建物が流されて被害を受けたということも  
聞き、本当に大変な状況だということがわかりました。わたしは、「こんなに被災をして復興で  
きるのかな? 無理なんじゃないのかな?」と思っていたけど、10年くらいかけて復興していく  
という話を聞きました。正直、「長いなあ」と思いました。

びはんの方に復興について話を聞くと、ほかの店や町に比べて再開が早かったことがわかりま  
した。専務さんは、震災の翌日から、山田のために何かしなければいけないと考え、いろいろな  
人に連絡をとったそうです。今のお店が再開できるまでの間、仮設のお店や移動販売をしている  
ときに聞いた、「早くお店を再開してほしい」というお客さんの声にこたえるために、おぼん前  
までにはという目標でがんばってきたそうです。わたしは、震災の翌日、「さくら幼稚園」にひ  
なんしていました。とても山田町の未来や将来の様子を考えられる状況ではありませんでした。  
でも、そんな中で専務さんは、少しでも山田の人がぐらしやすいようにとたかさんの努力をして  
くださっていました。専務さんの、山田の町を思う強い気持ちを感じました。

魚市場の方にお話を聞いたときには、去年までの2、3割だけど魚がとれはじめているという  
ことを聞き、うれしく思いました。取材をした時間は夕方だったので、作業の様子は見ることは  
しなかった。ちがう日に先生方が水あげの様子をビデオでとったものを見ました。暗い中  
でもたかさんの漁師の方々が一生けん命働いていました。震災前に比べるとまだまだだそうです  
が、山田の復興を信じて、そして生きていくためにがんばる漁師さんの姿に人間の強さを感じま  
した。

わたしは、学習発表会で漁師のおかみさんの役をえんじることになったのですが、漁師の方々  
の漁をしている姿を見て、真剣にえんじようとあらためて感じました。

練習期間は短かったのですが、漁師をばげますおかみさんの役がしっかり表現できるように練  
習しました。特にがっかりしている漁師に「何しけだあ顔してんだあえ」とかつをいれる場面  
や、「日本中の人だづが応援してげんだよ」と言う場面では、本当に気合いを入れて練習しま  
した。また、復興に向けてがんばっている町の人や漁師さんのことを考えると、「負けていたら  
ない。最高のえんぎをしよう」と力になりました。

本番では、満足できたし、会場のみなさんにも思いを伝えられたと思います。

しっかりと復興するまでには、10年かかる見通しなのだそうです。私も、10年後には21才に  
なっています。私も人のためになるような仕事をしたいと感じています。私の将来の夢は薬剤師  
です。こんな私でも、少しでも復興の手助けができたらと、今、がんばっています。

山田中学校1年 伊藤真由

私が、あらためて「支え合うこと」の大切さを感じたのは、3月11日に起きた東日本大地震から今日までのことである。地震が起きた日のラジオを聞いていると、色々な情報がながれてきて、次の日、自分の町を見るのがこわかった。

テレビではよく、外国でおきた大地震や津波を放送しているけど、まさか、自分もそんな体験をするとは、正直思ってもいなかった。もちろん、夢であってほしかった。夜中の地震のたびに目が覚めて、ただ、ただこわかった。でも、私の家族は「大丈夫」と何度も声をかけてくれて、少しだけ、ほっとすることができた。

3月11日の山田町は、想像以上に変わりはてていた。海に近かった家は、もちろんない。町の一部が焼けている。橋の上から自分の町を見下ろした時、あまりのショックで、一瞬、声が出なかった。みんなは、無事なのだろうか、とか、とても心配でたまらなかった。

地震が起きた日は、卒業式のちょうど1週間前だった。卒業式がみんなそろってできないということを知ったとき、すごく悲しかった。3月11日の大地震で、何もかも変わってしまった。一度は他の町へ行くことなどを家族で話しあったけど、大好きな自分の町から離れることに私は反

対だった。山田のお祭りも好きだし、仲の良い友達と離れ、他の学校に通うことがいやだった。

私は津波のとき、高い道路に逃げたので津波を目の前で見た。川からすごい勢いで水が流れてくるのや、壁のようになって襲ってくる波、流れてくる電信柱や家の屋根、2、3人の人が救出されるのを見た。津波の一部始終を見て、山田町は変わってしまった。やっぱり残りがかった。

大きな余震がつづく中、私とお母さんが再会したのは3月12日。私は、意外にも早く再会できた喜びが、こみ上げてくるばかりだった。でも、お母さんは、それだけではなかった。朝早くから、私とおじいちゃん、おばちゃんを探してくれていた。お母さんが泣いていたのは、今でも強く印象に残っている。「大丈夫」とはげましてくれた、家族や親せきの言葉も印象に残っている。

そんな経験から感じたことは、やっぱり支え合うということだ。私が避難していた親せきの家では、食べ物から着る物まで、いろいろな物を分けてくれた。1カ月くらい私たちを支えてくれた。そのおかげもあり、住む所も見つかって楽しく学校に通っている。今度は逆に何かしてあげたいと思った。

学校には、全国からの物資や手紙が飾られてあってすごいなと思った。この感謝の気持ちを絶対に忘れず、震災に負けないように頑張りたい。最近、被災したお店が次々とオープンしていて、すごくうれしいなあと思う。それが山田町民の元気にもつながると思った。そして、支え合いながら、一日でも早く、復興できればいいなあと思う。3月11日の大地震は忘れない記憶でも

ある一方、忘れてはいけけない記憶なのではないかと思う。そして、みんなの支えがあったからこそまで来れたんだということは、忘れないようにしたい。

地震から約9カ月。今でも、まだ不安なことはたくさんあるけど、こういうときだからこそ「支え合うこと」が大切だと思うし、それを意識して過ごしていかなければならないと思った。あらためて「大地震」ということから、「支え合うこと」を考えさせられた。私は、こういう災害が起こったからといって、人に頼ってばかりではなく、勉強でも、部活でも積極的に取り組めるようにしたい。

「やまだの作文」第40集

## 私を変えた母の教え

〔山田〕

17

山田中学校2年 佐藤雅依瑠<sup>あい</sup>

私が今、伝えたいこと、それは「誰しも一人じゃない」ということだ。これほど一人じゃないということを私は痛いほど思い知らされたことはない。

3月11日、私たちは未曾有の大震災を経験した。学校から見た美しい山田の景色、地域の人々の笑顔、家や大きな建物も昨日まで当たり前にあっただとは思えない無惨な姿となった。家族はど

うしているだろう。私の家は？ 物は？ そんなことばかりが頭をよぎる。あの時の気持ちは今も、そしてこれからも忘れることはないだろう。

次の日の午後、母が私を迎えに来てくれた。母が、「無事でよかった」と涙を流して言ってくれたあの時、私は涙が止まらなかった。それから2日くらいたった。気仙沼へ仕事に行った父が帰ってきた。運送の仕事をしていて、いつも明るい父だったが、その時は違っていた。「これからどうすればいいんだろう……」。そう呟いた父の表情は今まで見たことがないほど疲れきっていた。私は心が締めつけられた。

数日後の山田も、あの時と変わりない無惨な姿だった。町のおいも潮風というよりも魚が腐りきったような、すべてが燃えてしまったような、表し方のないようなおいだった。本当にこれは自分の住んでいる町なのだろうか……。そんな思いと共に自分の目にうつる現実を疑った。涙が出そうだった。いつもは、学校が面倒だと思っていた震災前とは逆の思いがあった。こんなに学校に行きたいと思っただのは初めてだ。電気も水もない生活はとても苦痛だった。あらためて今までの便利さ、裕福さを知った。

昼夜問わず揺れる。余震が来るたびに恐怖心がよみがえる。いつになったらこの生活から離れることができるのだろうか。そんな不安が毎日続いた。そんなとき、母が言ってくれた言葉が私のそれまでの気持ちを変えた。

「確かに毎日地震が来て怖いかもしれない。けど怖いのは雅依瑠だけじゃないし、お母さんも

怖いけど家族の命を守らなきゃならない。今度また大きな地震が来たとき、足を引っぱったら自分だけでなく他の人まで犠牲になるかもしれないんだから。強くなれ」

その言葉で私は自分の心の弱さを思い知った。それと同じように自分は誰かに助けられたり、助けたりしながら生きている、たとえ離れていても一人じゃないんだという気持ちがあふれてきた。母のその言葉で少しは心が軽くなった気がした。少し強い余震が来た時、私は今でもその言葉思い出す。

何日かたって、ようやく電気が復旧した。あの瞬間は忘れられない。やっと元の生活へと歩み始めているのだろうと思うと心がはずんだ。そのうち水道も復旧し、元の生活と同じようになったが、町の様子はあまり変わらない。しかし、元の生活に戻り始めてきたのも、復旧させるためにがんばっている人たちのおかげだと感じている。

震災から4カ月くらいたって、町は少しずつ活気と笑顔を取り戻しつつある。しかし、この震災が残した大きな傷痕が元に戻るにはまだまだ長い年月がかかると思う。全国各地から来るボランティア、支援物資、がんばれという励ましのメッセージ……。日本だけでなく世界の人々がこの震災復興のために一つになってがんばっているのだと思うと、感謝の気持ちがかみあげてくる。震災は大きな爪痕を残していったが、私たちに「一人じゃない」と教えてくれた。

今考えれば、確かに支えられて生きていると心の底から思える。自分自身だって両親がいて、両親にもさらに両親がいるというように親がいなければ生まれてこられなかったし、一人だけで

生きていくことはできないと思う。自分が普通の生活ができるのも自分たちのために働いてくれたり、動いてくれたりする人たちがいるからだ。

私は、震災で多くのことを学ぶことができた。さまざまな体験と母の言葉がなかったら、この8カ月で周りの人たちのことを考えて生きていかなかったと思う。これから私は自分だけでなく、周りの人たちを考えられる思いやりのある人間になりたい。母はきつと私にそう伝えたかったのだろう。

「やまだの作文」第40集

## 早くみんなが笑える町に

〔山田〕

18

山田中学校2年 佐藤明恵

東日本大震災。罪のない多くの方々をたった一日でこの世の人ではなくしてしまった。たくさんの家や思い出も破壊して。

あの日、奇跡的に震災5分前に撮ったクラス全体の笑顔の写真がある。その写真を見ると、怒っていても、笑っていても悲しくなり、涙があふれる。「この時は、みんなとつらい体験をし、一番の友達を失うなんて思わなかったなあ」。過去に戻れないと分かっている、震災から

8カ月たった今でもまだ、心の整理はついていない。

3月11日。岩手・宮城・福島を大きな地震と津波が襲った。あの時、人生で初めて「死ぬかも」と思った。町の様子も見えず、情報も入らず、あらためて「震災にあったんだ」と思わされた。体育館に全校で避難して、暗くなって気付いたら色んな噂が流れていた。本当の事や、大げさな事。でも、あの時は全てが本当に思えた。それだけ、避難はつらかった。

次の日、私は兄弟と共に内陸に20日間、預けられた。その中で、震災をばかにする人に出会った。その人は、私たち家族を被災者だとは思わず、普通に「映画みたいだよー。ありえなーい」と笑っていた。悔しかった。なぜ、理解してくれないんだろう。そんな事、思っても口に出すことじゃない。だって世界には70億人も人がいる。全員が理解し合える訳がない。でも、相手側の立場になって考えれば少しは理解できるんじゃない？ そんな思いが心に残った。

でも、世界には支援の声がたくさんあった。Tシャツ。靴。ノート。スクールザック。その中で、私が立ち直る、心を整理するために必要な言葉を今日、見つけることができた。「あれはあれで必要な過去」――。シンプル。そして何も考えてないような気もする。これはタレントのベッキーさんの言葉だ。自分には心をふわっと浮かせてくれる、優しい言葉だった。大切な友達と離ればなれになった。たくさんの方が亡くなった。それがなんで必要？ そう思った。でも、自分を責めずにいられるようにしてくれた。前へ踏み出す勇気をくれた。自分にとって必要な言葉なんだったって思えた。うれしかった。

まだ、震災の傷は消えてない。いや、消してはいけないと思う。二度と未来の人に同じ思いをしてほしくないから。山田町は震災の傷痕を消さずに何らかの形で残してほしい。復興をがんばって、早く町のみんなが笑えるようになったらいい。

自分は、生きていこうと思う。どんなに苦しいことがあっても、どれだけつらいことがあっても。生きたくても生きられなかった人がいる。人のために自分の命を犠牲にした人がいる。生きたくて、がむしゃらに津波から逃れた人もいる。そんな人たちに堂々と、「自分は、みなさんの分も人生を楽しみ、充実させ、一生懸命生きました」と言えるように。生きていくことにつらくなり、今にも自分で命を絶とうとしている人。苦しみを人に言えず苦しんでいる人。そんな人たちが一人でも多く救えるようになりたい。ほんの少しでもその人の心をいやすことができ、生きる力を与えられるような、そんな人になりたい。

「10年後の自分へ。周りの人を笑顔にできてますか。もちろん、自分は笑顔ですよね？ 苦しい時、つらい時は泣いてもいい。でも、周りの人まで悲しませないで。そして、私が生まれた時、私は泣いていて周りは笑顔でした。私が死ぬ時、周りが泣いて私が笑顔になるような人生を」

## 山田中学校3年 富士有哉

3月11日、思いもよらぬ出来事が起きました。

この日は、たくさんの人がいつも通りの日常を過ごして、いつも通りの景色を見て、いつも通りに過ごしていたでしょう。そう、僕もその一人でした。学校に通い、友達と何気ない会話をし、普通の学校生活をしていました。誰もが、あんな悪夢を想像してはいなかったでしょう。

授業が終わり、掃除を終え、帰りの短学活をしている時でした。グラグラと揺れはじめました。揺れは思ったより強く、長い時間揺れていました。突然の大きな地震に叫び声なども聞こえました。その時、先生の「外に避難します」という声で、僕たちは校庭へ「おはし」（押さないう・走らない・しゃべらない）を守り迅速に避難しました。この時点では、大きな地震だったなとしか思っておらず、津波も来るわけではないという甘い考えでした。

校庭に避難した僕たちは体育館に移動しました。この時は、早く家に帰りたいたいと思っていました。校長先生の話聞いていました。その内容は、町は大変な状況で、家に帰るのは困難なので、ここで一晩過ごすということでした。その後、バッグを取りに自分のクラスに戻りました。教室から見た光景は、かなり衝撃的で信じられませんでした。何度か遊びに行った友達の家が跡

形もありませんでした。そんな光景を見た後に、体育館に戻り、津波のことや、これからどうなるんだろうということ友達と話していました。

突然のことにパニックになり、泣く人も多数いました。辺りが暗くなっても、電気もなく、水もない。毛布が2枚あり、僕たちは7人くらいで使いました。その日はかなり寒く、腹も減り、今まで経験したことなかった日でした。

夜になりました。外は暗いはずなのに、赤く明るく光っていました。外を見ると真っ赤な炎でした。火事の勢いは強く、ここまで火が来る恐れがあったので、山田高校に避難しました。空を見上げると、いつも以上に輝く星空でした。僕たちは、山田高校の体育館で寝ました。目が覚めたらいつも通りの朝が来るはずと願いながら。しかし、状況は変わりませんでした。朝食が出ました。おにぎり一つと、コップ1杯の水でした。食べ物の大切さを実感し、作ってくれた人たちの優しさに感動しました。

一番心配だったのが家族の安否です。父は内陸の方に行っていたので大丈夫だと思っただけけれど、母は地震の時間帯は仕事帰りで、兄は遊びに行っていました。嫌な予感もして不安でしたが、昼ごろに母が迎えに来ました。心が落ち着きました。やっとのことで家に帰ることができると思うと安心しました。町の様子がとても気になりましたが、裏道から帰ったので、いつもと変わらない景色でした。本当に津波が来たのか?と思いました。

家に着くと、家族全員とばあちゃんたちも無事で安心しました。疲れや緊張が一気にほぐれま

した。ほっとしたせいも、腹の虫も鳴きました。でも、水もなく、食べる物も家にはありませんでした。食料を探しに兄と外に出ました。町の様子も気になり、見に行きました。地獄の光景でした。ばあちゃんの家があった所の一帯は、津波と火事によって大きな被害を受けました。

見覚えのある家、小学校からの友達の家すべてを焼きつくしてしまいました。ばあちゃんの家にあった僕の思い出の柿の木も流されていました。心臓が止まるような出来事でした。暗くなってきたので家に帰り、食べる物もないのでボーっとして、家族と今回のことを話し合って寝ました。でも、すぐ目が覚めました。何とも言えない気分でした。

3月13日。まだ火事は続き、余震も絶えず、不安でした。この日は食料を求めて、いつものスーパーに行きました。もちろん営業はしていません。しかし、流された商品を自由に拾っていいという許可があったので、拾わせてもらいました。こういう日々が何日か続き、ついに電気が通りました。3月19日、地震発生から9日目のことでした。その2日後に水道が通りました。地震発生から1週間はとてつらい日々でしたが、人と人との関わりや、何気なく使う水や電気の大切さを学びました。

千年に一度といわれる今回の震災は、失ったものも大きすぎましたが、得たものもあります。それは、支え合う大切さです。何十年先も、東日本大震災について忘れず、この気持ちを次世代に受け継いでいかなければなりません。

「やまだの作文」第40集

## 「うつか胸を張って」〜僕の挑戦〜

〔山田〕

20

黒沢尻北高校1年〔当時・山田中学校2年〕 佐藤貴大<sup>たかひろ</sup>

いつもの練習をするために――。そう、いつものように。

平成23年3月11日。あの日中学2年生だった僕は所属しているソフトテニス部の部活動のため、学校から少し離れた体育館へ移動しようとしていた。帰りの会終了のチャイムが鳴り、教室を出ようとしたその時、今まで体験したことのない揺れに襲われた。先生の指示で僕は机の下にもぐった。ものすごい地鳴り、そして悲鳴。一旦おさまっても余震がすぐに襲ってきた。

僕達はその地震とともに昨日までとは異なる世界に入り込んだようだった。中学校は高台にあり、まわりは山に囲まれている。僕達は教室から外へと避難した。海からは遠いのに、油が浮いた海とドブの水が混ざったような臭い。息もしたくない臭いだった。山田町がどんなことになっているか分からない状況で生徒を下校させるのは危険だという学校の判断で、その夜は体育館で過ごすことになった。先生方と僕達生徒、そして避難してきた人達は、飲まず食わずで、暗く寒く長い夜を過ごした。避難所になった中学校には沢山の人々が避難してきて、町の状況を知らない僕達に本当かどうか分からない情報はいってくる。町にはもう何もないとか船が陸のあちこちにあって……。その中の1人が来る時に火事になっていたと言い、万が一に備え、中学

校よりもさらに高い山田高校へと歩いて避難した。暗闇の向こうに赤い火が見えた。火の手はまだきてはいないと確認し、束の間、ほっとした。高校には既に千人近い人達が避難していた。みんなが家族の安否を一秒でもはやく知りたがっていた。一人一人が不安や焦りと戦っていた。

僕が家族に会えたのは震災から3日後のことだった。家族は5人。父と母、兄と姉と僕だ。盛岡で仕事をしている父は回り道をしていつもの何倍もの時間をかけて山田町にたどり着いた。何かあったときのためあらかじめ家族で避難場所を決めていたので震災当日から家族が逃げているであろう小学校に父は向かい、再会し無事を確認したそうである。人づてに中学校の生徒全員無事だと聞いたという。

家族全員がそろったのは震災から1カ月くらいたった頃だ。海沿いにある僕の家は第1波にのまれてしまっていた。この日を境にあたり前だった日常生活が避難所生活へと変わった。小学校の体育館には何百人もの人々がいた。毎日何度となく襲ってくる余震と津波警報に緊張はほどけず安心して眠ることができない。それでも朝になれば太陽が顔を出し少し元気が出た。けれど町の惨状も毎日目についた。3月だというのに雪のちらつく寒い日が続いた。何百人もの見ず知らずの人達との体育館での共同生活、友達とも会えない。つらい日々は続いた。

僕は3月末に行われるはずの「都道府県対抗全日本中学生ソフトテニス大会」に出場するため、地震の前日まで練習に明け暮れていた。この大会は中学生としてのテニスの総決算であり、大きな挑戦でもあったからだ。

だが当然のこととして大会は中止になった。もちろん残念だったが、仕方のないことだ。日本中が大変なことになっていたのだ。けれどそれとは別に少し悲しいことがあった。県の選抜メンバーとしてのユニホームを僕一人だけ津波で流されていたのだ。僕は母に、「何で持って逃げなかったの?」とちよっぴりとがめるように言った。母は「今までにない揺れだったから何も持たずに逃げた。まさか大津波が来るとは思っていないく揺れがおさまったらもう一度帰ってくるつもりでいたから、ごめんね」と言った。謝る母を見て僕は自分の言葉と愚かさをすぐに後悔した。ユニホームを取りに戻ったら母はここにこうしていないかもしれない。謝るのは僕の方だった。

けれど両親は顧問の先生に相談してくれた。すると先生は「確かにせっかくの県選抜のユニホームだからなあ」と両親や僕の気持ちを察してくれ、ユニホームを新調してくれたのだった。そのユニホームは今、僕の下宿の部屋にかけられ、毎日僕にプライドと感謝の気持ちを自覚させ、励ましをくれる。感謝の気持ちは僕を再び奮い立たせてくれた。「頑張ろう」という気持ちが強く湧き上がってきた。

僕の中学校は被災をまぬがれていた。しかし、町は僕の知っている町ではなくなっていた。いつも行く近くのコンビニは柱だけになっていた。自衛隊の搜索活動も毎日行われていた。まだ町はがれきだらけで、家が流されてしまったため避難所での待機が始まった。

僕のテニス人生は再スタートしたはずだったがテニスをしたという思いは日を追うごとに募

るものの、練習場所もなく、限られたスペースでの生活に心も体も参ってきていた。地区中総体が近くなってくる。練習をしていなくても試合には出なければならなかった。運動ができなかった3カ月間は思った以上に身体のダメージとなって僕にあらわれた。筋肉は落ち、テニスの感覚を取り戻すのにも時間がかかり思うように身体が反応しなかった。中学生としての最後の大会、県中総体。この大会へ向けて普段と同じように練習をしてくる相手にこっちのコンディションなど関係なく、コートに入ってしまったえば対等であり、どんな言い訳まがいの事を言っても負けてしまえばそれで終わりである。

同じチームメイトでも被災していない人は、僕とはやっぱり感じ方や考え方が少し違った。帰る家がある人は、気持ちの上でも安定しているように見えた。被災した僕にはテニスが思うようにできない葛藤があった。団体戦は負けてしまったが、個人戦ではベスト8に入り、東北大会の切符を手にした。チームで来るはずだった青森の会場に僕は立っていた。心の中にチームメイトの声が聞こえてきた。あいつらの分まで頑張ろうとさらに強い思いがこみあげてきた。練習量も相変わらず少なく不安だらけで、ベストの自分ではなかった。でも不思議と試合では緊張しない、それだけはちよつとした僕の強みである。両親は山田から青森まで応援に来てくれた。結果は2回戦敗退だったが「ここまでよく頑張ったな」とほめてくれた。今まで家族に支えられてテニスができていたことに僕はこの言葉を聞いてあらためて気づき、そして感謝した。

中学卒業が近づくにつれて、テニスを続けたいという思いはますます募っていった。そして僕に大きな選択をしなければならない時が訪れた。地元に残るか、内陸の強豪校に進むか――。仮設住宅の4畳半の部屋で母は言った。

「震災のせいにすることなく、こんな時だからこそ夢を追いかけなさい。後悔のないように」  
家族に背中を押され、今山田町を離れ下宿生活を送っている。テニスができる喜びをかみしめながらボールを追いかけている日々は、夢のような時間である。あの震災で僕達家族の生活は一変してしまっただが、本当に沢山の方々に支援していただき、心のあたたかさを頂きました。炊き出しのラーメン、歌手の方々の歌声。本当にありがとうございます。

勉強との両立や下宿生活での自己管理など頑張らなければならない場面は多いが、日本一を取るといふ大きな目標に向かって僕は歩いている。  
いつか胸を張って、支援してくれた人々や家族にありがとうと、そして自分自身に「やったぞ」と言えるように毎日を積み重ねていこうと思う。

平成24年度「甦れ日本！高校生アスリート作文コンテスト」  
財団法人学生サポートセンター理事長賞

山田南小学校長〔現・盛岡市立杜陵小学校長〕 佐賀敏子（58歳）

大きな揺れの後、校庭に全児童を無事避難させました。その後、多くの人たちが自動車で校庭に急いで避難してきました。防災無線が切れ、情報は何も入りません。「子どもたちを守らねば！」と強く思いました。ゴゴオツと大地は休みなく揺れ、ただごとではないことが起きていると感じました。

ラジオから「津波の高さは3メートル」という放送があり、「大丈夫だ」という声が校庭にいる人たちから聞こえました。すぐに、60人を超える保護者の方が子どもを引き取るため来校されました。直ちに整列をした後に、安全な場所への避難を約束してもらい、児童名簿に担任が1人ずつチェックしながら保護者に引き渡しました。残った多くの児童は校庭で休ませました。

恐ろしさの中で、海の方を見ると、黄色い煙が見えます。「あれは、何なの?」。津波が巻き上げた土煙でした。自分の体も心も震えていました。避難者は増える一方で、気が付くと、児童の列は校庭の端まで移動せざるを得ない状況でした。避難訓練では想像もできぬことが起こっていたのです。

その後、男性職員と相談をし、体育館を避難所とするため、器具室にあったマットを敷きました。隣接する幼稚園のホールに児童を避難させ、女性教員に担当してもらいました。最後に迎えに来た保護者に引き渡したのは、3日後のことでした。避難した大勢の地域の方々と、体育館は足の踏み場がありません。さらに、被災した消防署から、本部を本校に設置したいという要請を受けました。職員室の一角をお貸ししました。しばらくして、自衛隊の方が水と毛布80枚を届けられました。職員は、夢中で水を運び、ポットやジャーに入れて避難の方に提供しました。体育館では「寒い」「空腹だ」という声が多く、職員は、自分の持っている服を提供したり、布テープで隙間風を防いだり、凍ったプールから水洗トイレの流し水のために水をくんだりしました。

近隣の病院のスタッフが保健室に避難してくると同時に、けがを負った方やおぼれた方が運ばれてきて、保健室は瞬く間に医療の現場となりました。近所の上野建設さんから男性職員が発電機を2台借用し、体育館への避難者のためのヒーターと、保健室で始まった医療のために使用しました。3日間、不眠不休だけが人の診療に当たるスタッフが頭が下がりました。若い男性教諭は消防からの依頼で、高架橋に着いた車から軽油を運ぶ役も引き受け、真っ暗な山道を登っていました。

あの惨状の中で、「地域の方々に寄り添うこと」と「児童を守ること」を、どのようにしたら両立できるのか、私は自問自答を繰り返していました。「とにかく、どちらもやるしかない」との結論に達しました。

保健室で治療を受けていたおばあちゃんが息を引き取られたのは、夜中でした。急ぎよ遺体安置場をつくりました。「先生方、今後どうなるか分からないから、全教室の机やいすを廊下に出しましょう。寒いので、カーテンを撤去し、毛布代わりに渡しましょう」。私の提案に、職員は真剣な表情でうなずき、黙々と作業に入りました。役場の方が学校に来るまでの3日間は、全ての課題に学校職員が対応しました。

あの日から、学校は、教育を担う場から地域の方々が生き延びるための場となったのです。いろいろな要望がありました。

アレルギーの赤ちゃん用のミルクを探してください。

老人用のおむつが欲しい。

寒くてしょうがないから、ストーブを増やしてください。

あの人がおにぎりを2個取りました。ずるいから注意してください。

私は食べなくてもいいから、子どもたちにあげてください。

生き延びるために皆、必死でした。本校は、避難所、病院、消防本部となり、全国各地からレスキュー隊や自衛隊、医療スタッフが入ってきました。避難者は多い時は1180人。大人数の避難所となり、自治会の立ち上げのお手伝いと、定例の避難所打ち合わせを企画しました。

並行して、児童や家族の安否の確認、転出入の対応もありました。避難所を巡り、だれがどこにいるのか、一人一人の確認をしました。避難所ごとの修了式、図書室での卒業式も、多くの方々の支援で挙行することができました。学校を再開できたのは4月20日のことでした。

家族を亡くした者2人、被災者7人と、多くの職員がつらい思いをしながらも心一つに対応してくれ、心から感謝しています。

あれから3年がたちました。児童数が4月には約120人減少となります。

今、子どもたちが夢や希望に向かっていくこうとする心の力をつけるために、私たち職員は、地域の方々との交流を活発にしながら、伝統芸能「虎舞」の継承や学力向上、心のサポートに取り組んでいます。校庭にある仮設団地の方々からは、校庭整地や虎舞の衣装制作と、学校に力を貸していただいております。運動会にはお祝いの大きなメッセージが校庭フェンスに飾られ、子どもたちはとても喜んでおります。飛び入りで踊りも踊っていただき、共に生きていることへの感謝でいっぱいです。

諸先輩の築かれた学校の再生は難しいのですが、「ピンチをチャンスに変える！」という考え方のもと、明るく心の通い合う学校づくりをめざして、質の高い職員集団と共に見えないゴールに向かっていくこうと思っています。

最近、なかなか進まない復興や厳しい現実を前に、町民の方々の心が少し疲弊しているのを感じます。保護者が落ち込んでいると、子どもたちには、すぐに変化が見えてきます。どの子

にも、学校にいるときは明るく元気に過ごさせたいと思っています。また、「人間関係力」をつけ、集団の質を高めることが大切です。

私どもができること、それは学校で自己肯定感を味わう機会をたくさん作ることです。未来ある子どもたちが心を一つにして山田町の復興の力になったら、どんなに素晴らしいでしょう。

今後の課題として、地域防災のあり方があります。学校が避難所としてある限り、防災組織に入れていただき、いざというときに、協力し合って共に困難を乗り越えることができればと強く願っております。

## 夢であってほしかった

【山田】

22

### 阿部トシ子（85歳）

いまだかつて経験したことのない、天井が落ちてくるかと思うほどの揺れ。私はとっさにテーブルにしがみつき、押さえた。あー、あー、大変だー、大変だーと大声を上げながらストープの火を消し、仏前の花瓶の水がこぼれないように押さえた。もう生きた心地がしなかった。少し揺れが収まってから表に飛び出し、路上にしゃがみこんだ。人通りもないが、恐怖のあまりみんな家の中にいるのだろうか。

再び家に入って、手提げ袋を持ち、襟巻を首に巻き、隣家の太田幸商店ゆきに行く自動ドアが開いていた。私は普段から「お姉さん」と呼んで慕っている奥さんに向かって「津波が来るから逃げて」と叫んだ。奥さんは2階から手提げ袋と上っ張りを持って降りてきた。しかし「父さん（夫）は逃げないと言っている」と、再び2階に上ってしまった。あの時が今生の別れになるうとは。今になって考えると、声を掛けに行ったことがせめてもの供養になるのかもしれない。残念な思いと、無理にでも引っ張ってくればよかったという後悔の念が交錯して、痛恨の極みである。

太田幸商店から戻ったら鳥かごが落ち、レモンカナリヤ1羽が出口の所にうずくまり、私を見上げていた。主人に「どうしよう」と聞くと、「そのままにしておけ」と言う。日頃かわいがっていただけに不憫だったであろうが、何とも致し方ない。まさか大津波が襲来してくるとは思わないし、家に戻ってこれないわけではないと考えたので、貴重品にも手を付けず、着のみ着のまま手提げ袋一つを持っただけで表に出た。問瀬商店のご夫婦と一緒に、御蔵山おくらやまの高台目ざして、一目散に逃げた。既に宮古信用金庫の職員の方全員が避難していた。すると沖の方から、黒い波がまるで竜のような勢いで防波堤を越えて来た。太田幸商店さんと関嘉さんの家屋が並んで流れてきた。そして、川最さんの家屋にぶつかり、バリバリと音を立てた。あつという間の出来事だった。わが家は視野に入らず、見るができなかった。ぼうぜん自失というか、ああ、夢であってくれと思った。

どんどん流れてくる板を伝って渡ろうにも足がすくんでしまい、男の人におぶわれて役場にたどり着いた。その夜は公民館に身を寄せ、停電の中、温め合って一夜を過ごした。前日の10日、不吉な予感がしたのか、机の引き出しを全部整理した。アメリカ在住の友人から来た48通の手紙を年月日ごとにまとめ、クリップに止めてそのまま机上に置いた。いったん逃げたのに、家に物を取りに戻って波にさらわれた人たちが多くあると聞く。一瞬のうちに波にさらわれ、どんなにもがき苦しんだであろうか。

私も貴重品などを取りに蔵に入っていたら、もう、この世にいなかったであろう。命あつての物種、余生を一日一日大切に暮らしてゆくよりほかない。800人余の尊い命が失われている。私事ながら姉は96歳で津波により生涯を閉じた。普段、100歳まで生きたいと言っていた。

犠牲者のご冥福を祈る。合掌

### 3月11日以降の日記より

〔山田〕

23

梅木なか（91歳）

避難所山田高校講堂において2年生山崎宥美ひろみより渡されたノートブックに記す

3月11日 6時起床 曇り午後雪

昨日届いた書道研究一東誌4月号表紙の左下に塾生9人の名と自分の雅号を書き入れた。祐佳、知佳、大成、誠之輔、翔子、芽吹、真優、宥美、美優、佳月、次に半折を横にして、4月号に発表された段級位を学年別に表記して壁に画びょうで止めた。

これで明日土曜日の稽古の準備は完了、ほっとして日の暮れるまでは針仕事、木綿紘かすりの上っ張りの脇の擦り切れたところに当て布をして繕うと決めて8畳間の真ん中に据えてある文机ふづくえに向かって腰掛けていた。

2時46分、突如地震、グラグラッ、グラグラッ、すごい揺れ。書棚からバラバラと本が落ちた。集めて元に戻すと、また大きく揺れて何もかも落ちる、かつてこんな大きな地震に遭ったことがない。恐ろしくて立っていられず、とっさに机の下に潜り込んだ。あまりに激しい揺れに身は疎すくみ、心は脅おびえた。この時、この家はつぶれるに違いない、自分の命はこれが最期、この家と共に終わるのだと思い、眼を瞑つむった。とその時、玄関から大きな声で「津波が来る。早く逃げろ」と叫びながら入って来た人、民生委員白土盛さんだった。私は「ハイ」と返事をするなり隅にある机の抽斗ひきだしから預金通帳と印鑑の入った小さい手提げ袋をつかんで、盛さんの後について外に出た。

盛さんは国道を横断したところで左折した。私は高台に向かった。山田線の踏み切りを越え、

左手の急な坂道を上って行く。途中、人っこ一人に出会うことなく高台に着いて驚いた。大勢の人が集まっていて、顔を見合せても誰ひとり声を発しない。余震は続く。皆で海の方を見る。津波は突堤を越え、防潮堤を越え襲って来た。津波は、巨龍が牙を剥いて海の底から立ち上って来るように見えた。この高台の下に建ち並んでいた家々が将棋倒しに押し流されるのが見えた。

海に眼を向けると、突堤につながれていた漁船はほとんど転覆して、船の底の真っ赤な色がかぶかか浮かんでいるように見えたが、引き波にのまれ見えなくなり、突堤の海底が見えた。

雪がもそもそと降って来た。この高台の住人清水克子先生のお宅は近い。先生は毛布を持ち出し、私の肩に着せ掛けてくださった。また、知らない女の人が頭にかぶるようにとスカーフを下さった。やがて清水先生の御主人の車に乗せていただき、町指定の避難所、中学校へ向かった。

中学校は既に避難の人でいっぱい。入り口に大勢の人と立っていたら、火事だと叫ぶ人の声に北の方を見ると真っ黒い煙が上がっている。長崎か八幡町か？ 余震は続く。火災はあちこちから発生した様子。中学校も危ないと言う声が聞こえた。間もなく大きなバスが2台見えた。私は真っ先に乗せてもらい山田高校へと避難した。校庭には雪が積もっていた。グラウンドには避難してきた人たちの車が沢山並んで見えた。山高の大講堂は広く立派な建物で、避難の人が大勢詰めていた。

美優と宥美は高校2年生。ボランティアとばかり活発に働いていた。講堂の中、雑然と人の混み合った所をA班、B班、C班、D班と区分け、縦横に3本ずつ通路が定められ、厚い毛布が貸し出された。やがて、山崎宥美が避難者の名簿作りのため回ってきた。宥美が何も言わずにそっと私の前に差し出したものは青い色の表紙のノートブックとボールペンだった。私はこの心遣いにさして礼も言わずに受け取っていた。

講堂のステージの右端にポット三つが置かれ、水、白湯、お茶を自由に飲むように設けられ、湯飲み茶碗使用後は洗って元に戻しておくこと、と張り紙がしてあった。

3月14日 月曜

いち早く救護に来られた四国徳島市日赤医療救急班より下剤と安定剤デパス3日分頂く。お食事は昨日より2回。ここ山高だけでも2千人を超すと聞く。ヘリコプターで運ばれてくるおにぎり。どこの方々が炊き出しをしてくださっているのだろうか。

3月15日 火曜 曇り夕方から雪

徳島の救急班から、また薬を頂く。効き目が見えない。

3月16日 水曜 雪夜雨

午前中にバスで南小学校まで被災の跡地を巡って見る。国道も県道も自衛隊の尽力でがれきが片付けられ、車が通れるようになったことに感動。

3月21日朝9時

ステージからマイクを通して私の名が呼ばれた。横浜から次女の薫と、伴侶近藤正雄が慰問の袋を両手に提げ、ニコニコして立っていた。夜通しバスとタクシーを乗り継いで来たという。

短歌 十八首

早く逃げろ

「津波来る早く逃げろ」と急かせたる民生委員盛さん亡く  
プラスみなマイナスもみなゼロとなり唯ひとつだけ残りし命  
登り来て避難所めざす高台に仕事着 制服の無言の人ら  
高台ゆ無声映像見る如し防潮堤越え津波襲い来  
海底ゆもり上り来る大津波 堤防壊し家並を呑む  
突堤に繋がれし漁船転覆す赤き船底見る間に沈む  
ガスボンベかストーブか爆発延焼す町は火の海消す術空し  
高台も火の手迫れば住人の車に乗せられ中学校へ  
中学校も火の手近しと逃れゆく山田高校雪の校庭  
足冷えて二夜眠れず人の輪にそつと足入れて暖をとりたり  
避難所の山田高校講堂に数知れぬ人と仮寝のつづく  
大津波に浦の浜道海と化し田の浜・大浦 孤島となるも  
わが家は跡形もなし国道を線路を越えていつち行きけん

救われて県外避難の眼裏に津波に吞まれし人びと浮かぶ

老い我は命助かり遠く来て相模台地に桜見送る

断捨離とう言の葉 津波に吞まれたり何故 我は生かさされている

頑なに吾を支え来しは何ならん 津波に家無き土を見詰むる

鉢花の久留米つつじをあがなえり「老いの目覚め」と名札付きたる

生きていただけでも幸せ

〔山田〕

24

関谷担い手仮設団地住民自治会長 川端信作（76歳）

あの日午前9時半、県立山田病院眼科で緑内障予防の診察を受けた。11時半ごろ、愛車を運転して帰った。駐車場に車を入れないで自宅前に路上駐車した。

昼食後、2階へ上がりパソコンで仕事をした。妻は銀行へ行っていた。午後2時46分、突如大地震に見舞われた。いつもの揺れと違う異常さ。周囲の落下物に恐れおののきながらも、データを保存したい気持ちから思わずパソコン本体を抱きしめていた。3分経過しても揺れが収まらないので、危険を察知して大事なパソコンを放り出し、壁に頭をぶつけ、よろけながら階段を下りた。玄関の戸を開けたとたん、妻がタイミングよく銀行から帰ってきた。

「ただ事ではないぞ、津波が来るぞ。早く車に乗れ」。妻は「冷蔵庫の扉が開いたから、閉めに」と言い、家の中に入った。「何も持たなくていいから、早く乗れ！」

愛車に乗りエンジンをかけ、妻を待ちながら、カーナビのテレビを観た。まだ地震が続いていた。午後3時ごろだった。釜石魚市場が映しだされ、大きな渦を巻いて漁船がぐるりと回り、市場の建物に衝突して跳ね返されているのを見た。

「これはすごい。大津波だ！ 大変だ！」。まだ地震が続く。3メートルほどある庭木が道路側に傾いた。「地震がまだ収まらないうちに津波に襲われている？ これは本当か？」。今までは地震が収まって3分以上経過してから、津波が襲来していた。これは過去にない想像を絶する異常な現象だと思った。

「これは大変だ、早く車に乗れ」。側溝のふたの隙間から、水がプシュ、プシュと音を立てて順番に噴き出した。すぐ傍らの第7分団消防屯所前の十字路に、津波ががれきの山を押しながら襲来してきた。分団員が「津波が来た。逃げろ、逃げろ！」と叫び、走り出した。私も妻に向かって「何をしている、早く来い！ 車に乗れ、早く逃げろ」と声を荒げた。

津波が車に到達しそうで、思わず発進した。路上駐車していたのがよかった。曲がり角を左折した時、われに返り、妻が助手席にいないのに気付いた。「これは一大事！」。後ろ髪を引かれる思いだった。妻を捨てて逃げている自分が嫌になった。

やや高台の「ちびっこ公園」付近の広場に駐車し、波が引いた後、自宅の状況を見に行った。

路上はがれきの山で歩行が困難だった。自宅が見えた。路上はさらにうず高くがれきの山。数台の流された車、秋田ナンバーの乗用車ががれきの上に乗っかり、ランプが点滅していた。

妻が2階から顔を出した。「お父さん、生きていたよ」。安心した。私のため重なる叫び声を聞いて、妻が階段を降りて玄関を出たとたん、側溝のふたから水が噴き出し、すぐに津波が押し寄せてきたという。妻はひざまで海水に浸かり、びっくりして2階に駆け上がった。津波が玄関の戸を押し破り、がれきが一気に侵入してきた。2階は戸棚の中身が落ちて、足の踏み場もないほど散乱した。その上をはって窓にたどりついたという。

向かいのA子さん、Bさんも2階から顔を出していた。私は、妻と隣人の無事に安堵した。自宅は流されなかったが、倉庫のシャッターがいびつになり、1階は1・5メートルほど浸水した。

向かい隣のC夫人が「じいさん（夫のCさん、89歳）ががれきの隙間にいた男の子を見つけ、助け出し、連れて来ました」と言う。1年生くらいの男の子だった。ずぶ濡れになってガクガク震えていた。寒さもあつたが、よっぽど恐かったのだろう。CさんもC夫人もずぶ濡れになっていた。C夫人は浴室の柱につかまり、胸まで津波に浸かっていたという。

私は2階にあった衣服を手当たりしだいに探し、ずぶ濡れの3人に与えた。子供の運動靴が片方脱げていて、妻のゴム長靴を履かせた。子供の手を引き、避難所へ向かった。途中、住所を聞いた。「お家へ帰りたい」。ポツリと子供は言った。「ほら、ここはもう津波で壊されたがれきの

山だ。君の家も流されてないんだよ」。子供は黙り込んだ。

避難所の一つ、山田南小の体育館へ行った。千人は入っているようだった。ぼうぜんとした表情の避難民でいっぱいだった。子供の親族を探した。大声で呼べども叫べども、反応がなかった。隣接する避難所のさくら幼稚園へ行った。雪のちらつく園庭でたき火をしていた。ここも避難民がいっぱいで、それぞれが地獄のどん底のおぞましい体験を語り合った。

子供を知る人を探した。山田南小学校の先生がいた。「D君!」。先生は私に会釈して、D君を連れて行った。先生に預けてほっとした。

私の愛車は、山田南小校庭に置いた。隣のさくら幼稚園の園庭で、たき火に当たりながら様々な体験談を聞いた。

私の遠縁にあたるEさんは、私の家の近所の長崎地区で車を運転中に津波に巻き込まれた。脱出のためドアを開けようとしたが、水圧で開かない。栄養ドリンクの瓶を握り締め、渾身の力を振り絞り、窓ガラスをたたき割って脱出した。街路樹につかまると、近くで助けを呼ぶ声を聞いた。高齢の女性だった。水が引いた後に助け上げて自宅まで送り届けたという。彼のこぶしは、ガラスをたたき割った時にできたあざで黒ずんでいた。

長崎1丁目の方から大火災が発生した。北の方、八幡町からも火の手が上がった。私の目の前の第7分団消防屯所は、1階が浸水、ポンプ搭載の消防車は無事で防災活動に出動中だった。

町内被災地区の消防車は壊滅。被災を免れた数少ない分団の消防車が出動したが、町内はがれ

きの山で消火活動がままならない。しかも国道45号線が分断され、不通だった。

近隣の消防車が迂回路の農道山道を利用して（豊間根く関口く白石く猿神く赤松く飯岡を経由）到着。がれきの山が道路をふさぎ、消防車が入れず、周辺から放水していた。自衛隊のヘリコプターによる消火活動も行われた。火勢は衰えず、長崎1丁目の北西角まで燃え移ってきた。私の家の約100メートル前まで接近した。かろうじて被災を免れた自宅の2階にあるパソコンなどの貴重品を車に積み込んだ。その夜は雪のちらつく中、山田南小校庭で車中泊した。

隣の消防車も応援に駆け付け、夜を徹して消火活動に当たった。3日後に鎮火したが、飯岡地区の山際、4丁目・2丁目だけが難を逃れた。田の浜、織笠も火災が発生した。

北海道から出動したある自衛官は、「阪神・淡路大震災にも出動したが、これはあの時よりも、もっとひどい状況だ」と話していた。想定外の大地震と大津波、そして大火災の発生、がれきの山。正に地獄の中にあるようであった。

翌早朝、車中泊した避難民が幼稚園園庭の焚火に集まってきた。私に声を掛ける人がいた。親しくしている近所の青年だった。第7分団員として消防活動の任務に就き、境田地区の防波堤水門を閉めに行ったという。水門を締め切らないうちに、堤防の倍以上もある黒ずんだ大波が押し寄せてきた。頭が真っ白になった。何が何だか分からないうちに、トタン屋根の角が衣服の右肩に引っかかっていた。周りのがれきが渦巻いていた。とっさに水中に潜り、夢中で泳いだ。気が付くと波打ち際に打ち上げられていたという。この活動で多数の殉職者が出たという。正に九死

に一生を得た奇跡である。

私の家は1階が浸水し2階の家具類が倒壊したが、片付ければ何とか住めそうだと思った。避難所での生活は、当初は隅っこで小さくなっていったが、夫婦共々いつの間にか避難所運営スタッフの手伝いをしていった。その支え手の一人として、物心両面で必ず復興しようとお互いを励まし合いながら暮らした。良いこともあれば、人の心の荒んだ一面に触れ、つらい思いもした。避難所暮らしの合間に自宅の後片付けや清掃をし、多忙な毎日を過ごした。5月になると、車で10分の所にある私の山小屋で仮住まいを始めたが、親戚の大工の見立てによると、自宅は地震と津波の液状化による土台のゆがみで、修復は新築と同じ工事費となるという。6月22日、仕方なく全面取り壊しを決定した。妻の悲しみと落胆ぶりが、今でも目に焼き付いている。

私の親戚では、亡くなった人が8人もおり、近しい友人、知人を数えると20人を超えた。ある葬儀で出会った大槌町の知り合いは、「私のところは40人に及ぶ」と言っていた。

私ども夫婦は、奇跡的に助かった。生きていただけでも幸せである。無念の思いで亡くなられた犠牲者の皆様の分まで、生き抜くことが大切だと思う。多くの犠牲者方々のご冥福をお祈りする。

震災以来、全国そして世界各国の皆様方の、心温まる物心両面にわたる支援と激励に、心から感謝し御礼を申し上げます。

平成23年11月13日、私の住んでいる関谷担い手仮設団地の住民80世帯は、自治会を設立した。

ささやかではあるが、会長として活動を盛り上げ、一日でも早い復興を果たすことこそが、支援して下さる各位へのご恩返しではないかと思っている。

## 生かされた命をしっかりと生きる

〔山田〕 25

乳製品販売業 貫洞寛喜ひろのぶ (59歳)

大震災当日のことを思うと、いろいろなラッキーなことが重なっていたように思います。一つは、私が自宅にいたことで母も次男も早めに無事避難できたことです。長く大きな地震で、家が倒壊すると感じてすぐに2人を外に避難させました。家も電柱も激しい揺れで、これは今までの地震とは全く違うと感じました。

大津波警報が出たので避難するため家の中に入りましたが、母は仏様のものやら鍋釜類が散乱しているのを見て片付けをし始めたのです。「そんなのはいいから早く次男と車で逃げろ！」と言い、2人を逃がしてから、机の下に落ちた書類を机に上げて、いつも妻が用意している非常用リュックと寝袋、そして水1ケースを車に積んで、避難場所に向かいました。まだその時は、ほとんど車の通行もなくスムーズに避難場所に行つて、近所の人と話をして余裕がありました。何か取りに戻ろうかと思っていた矢先、海の方から砂煙のようなものが見え、何だろうなと

思っている時に「津波だ！」という声が聞こえてきました。

最初は近くには行けませんでしたが、家の屋根や残骸、そして車までが流されてくるのを見て、これが津波なのかと実感しました。しかし、自分の家が流されたかまでは想像できませんでした。みんな、ただぼうぜんとしていたように思います。

そのうち、流された家から火事が発生し、大音響と共に次々延焼していきました。その夜は、山田南小学校の校庭に車を止めて一晩過ごしましたが、妻と娘の安否が分かりません。心配だし、火事を目の当たりにして、とても眠れる状況ではありませんでした。

その日は、夕方から雪がちらついておりましたが、深夜には雪もやみ、きれいな満天の星空でした。火事は相変わらず大音響を上げながら、町内を燃え尽くす勢いでした。まるで地獄のような光景だと思いました。津波の被害を受けた所で発生していて、浸水したものの流されなかった家もかなり焼けてしまいました。

明るくなって近くの高台から見ると、町内のほとんどの家がなくなっているのが分かりました。もちろん自分の家も無いことが確認できました。昼ごろにはいろいろ情報が入ってきました。妻が牛乳の配達で行っていた大槌町も、娘が自動車学校に行っていた鶴住居町も津波と火事で何もなくなつたと聞き、不安が増しました。しかし、道路が寸断されていてどうすることもできませんでした。

その日から知り合いのお宅に3人でご厄介になって、温かい布団に入ることができましたが、あまり眠れませんでした。3日目の朝に妻と娘を探しに行こうとしたところ、高架の三陸自動車道から降りてくる同級生に会いました。その同級生は「大槌町で被害に遭って避難所から歩いて帰って来たが、その避難名簿に奥さんの名前があった。車でも行けそうだ」と教えてくれました。妻の無事を知って本当にうれしかったです。さっそく息子と車で迎えに行きましたが、妻の顔を見た時は涙がでてきました。

妻は逃げ場所が分からない不案内な街中を牛乳の配達中で、津波があとう分早く来ていれば、助からない可能性が大でした。運よく山際のお宅の所で「山に逃げろ！」と言われ、無事助かったそうです。車は流されてしまいました。そのまま隣の鶴住居町に、娘を探しに行こうとしましたが大規模な山火事が発生していて引き返さざるを得ませんでした。

その日の夕方、避難所の山田南小学校に行ったところ、私が黒板に張った安否情報のメモの脇に「明日香(娘)は、体育館にいます」と書いてあったので、走って体育館に行きました。

体育館の入り口付近で5時間ほど待っていたそうです。本当にうれしい1日でした。娘は、自動車学校に着いて何分もしないうちに地震に遭い、先生の指示で200メートル先の高台に避難したそうです。そこで堤防を越える津波を見て、その日は高台の老人ホームで夜を明かし、途中の避難所で、同級生の数人と一緒にもう1泊して歩いて帰って来たそうです。後で知った情報だと、娘が逃げた高台に避難した人は全員助かりましたが、別の避難所に逃げた方は半分以上が流されて助からなかったそうです。

その日は、ご厄介になっている知り合いのお宅で、ろうそくの明かりで家族の無事を祝って乾杯しました。その夜は娘と妻にはさまれて家族のぬくもりと幸せを感じて床に就きました。

地震から5日目の15日には、弟が仙台から車でガソリンやら物資を持ってきてくれ、帰りには携帯の電波が通じた所で、長男や親戚の方、取引先の方に無事であることを連絡してもらいました。これを機に、長男をはじめ親戚も安心したようです。

これからは、生かされた分、残りの人生をしっかりと生きていこうと思います。

## 心の復興めざし慰問に励む

〔山田〕

26

新保 公（60歳）

あの大地震の悲劇は絶対に風化させてはならないし、後世に伝えていかなければなりません。それが生かされた私たちの責務です。あの時、私は家内と2人で家の中にいました。私の家はJR陸中山田駅の、ちょうど後ろの方にありました。海岸から直線距離で五、六百メートルはあるので、まさかここまで来るわけがないと思っていました、揺れが収まってから家内と一緒に表で、崩れたブロックやタイヤを片付けていました。防災行政無線は「大きな津波が来るのが予想されますので高台へ避難してください」と呼び掛けていたのですが、全く無視してすっかり油

断をしていました。

片付けが一段落して家に入りかけたその時、向かいのアパートの住人が「津波が来たー！」と叫ぶのを聞き、脇目も振らずに家内に声を掛けながら一気に2階に駆け上がりました。上がった途端、どこかの知らない家が目の前に迫っていました。表を見ると、何と家も車もすごい勢いで窓の外を流されていきます。いつ家も流されるのかと、本当に焦りました。もしもあのまま茶の間に行ったら、足の親指に支障があった家内と一緒に走って逃げていたら、と考えるとぞっとします。津波が引くと、1階は天井までがれきで埋め尽くされていました。間もなく家の近辺から火災が発生して、ベランダから家の屋根やがれき伝いに避難所の山田南小学校に逃げました。その後、3日間続いた火災で町は焼失し、私は現在、織笠の仮設住宅で暮らしています。

当時大工だった息子は、大船渡市の綾里りょうりに通っていました。全く連絡が取れないため心配になり、被災から3日目に綾里まで歩いて行く決心をしました。取りあえず私の実家がある釜石まで行くつもりで、朝6時ごろ出発。途中で車に乗せてもらい、6時間ほどで釜石に着くことができました。翌日、自転車を借りて綾里まで行こうとしましたが、釜石駅近くの五の橋で、「川の底が見えるぐらい水が引いたからまた大きな津波が来る」と消防車が何台も出る騒ぎがあり、綾里行きを諦めて翌日、山田へ戻りました。

山田に戻って2日目、いつもの軽トラに乗ってひょっこり息子が帰って来たではありませんか。本当に信じられず、言葉も出ませんでした。その時は本当に神様に感謝しました。翌日、今

度は盛岡にいた娘が迎えに来て、家族3人、娘の所で世話になることにしました。娘の勧めに従い、盛岡の日赤病院で夫婦で受診したところ、家内の血糖値が500以上あったので、びっくりした先生が「このままじゃ帰せない」と言い、そのまま入院しました。しばらくして、内陸のホテルなどで避難者の受け入れが決まり、雫石の長栄館に山田町からの100人ほどと一緒に、私も息子と2人でお世話になることにしました。

長栄館は本当にありがたい所でした。温泉には入れるし、部屋は家族単位で与えられたし、幸せを感じました。しかし、生活にもだんだん慣れて時がたつてくると、皆が顔を合わせるのには日に3度の食事の時間だけ。食事が終われば楽しみもやる事もないし、皆それぞれ散らばっていく。人間、何にもすることがないと余計な事ばかり考えてしまうものです。

そんな時に、私が民謡をうたうことを知っていた幾人かの方から「あなたの唄を聞かせて」という声の時々ありました。そうか、やつぱり、ただじつとしていては駄目なんだなあ、みんなが好きな民謡を聞いてもらおうのが一番いいかもしれないなあと思ひ、盛岡在住の唄い手さん方に慰問に来ていただくことにしました。その時に私も一緒にうたったのですが、やつぱり皆さんの喜んで顔を見ると、民謡をやっていて良かったと思ひました。街の復興も大事だけれども、人間の心の復興が一番先に大事なんだと気付いたわけです。その事をきっかけに、何となく皆さんが打ち解けやすくなったように思ひました。まさに「芸は身を助ける」です。

それまで入院していた家内が、5月の末ごろに退院してきました。息子は既に山田に戻っていて、山田高校の避難所で暮らしながら、お世話になった方の身内の遺体探しなどを手伝っていました。今度は家内と2人、長栄館での暮らしが始まりました。6月20日、岩手県民謡協会のある方から声を掛けられ、私は「クボタ民謡お国めぐり」という民謡番組の収録中でした。その時、長栄館と一緒に生活していた山田町の佐々木さんから電話があり、妻が転倒して救急車で病院に運ばれたと知らせてくれました。北上での収録が終わり、入院先の日赤病院に駆け付けたところ、転んで頭を強く打ち、脳挫傷とクモ膜下出血が起きているとの先生の説明でした。私は神様に助けをお願いするしかありませんでした。

次の日の検査では、「出血が収まっているから大丈夫。ただ、しばらく入院することになります」と言われ、取りあえず一安心しました。お陰様で何とか回復し、7月にリハビリ専門の病院へ転院、10月初めに退院できました。私は6月半ばに仕事先が決まり、山田に戻っていました。そのころは息子が盛岡に住まいを構えて仕事をしていました。しばらく通院もあるので息子に面倒を見てもらいましたが、11月になると家内の希望で山田の仮設住宅で私と一緒に暮らすことになりました。

ところが翌年の2月ごろから体調がすぐれず、同時に精神的にも大分弱くなりました。本人の意思もあり釜石の病院へ入院することになりましたが、それからわずか2週間たつたかないかの5月3日、容体が急変し、亡くなりました。突然で悲しい事ではありましたが、亡くなる前の人生は、夫婦水いらずの生活で、とても幸せな時間を共有できたと思ひています。

何よりも私を救ってくれたのは、物心の付いたところから信仰している宗教です。教会で常々教えられている、「どんなことが起こっても必ず良くなっていく」というたった一つの言葉でいつでも前向きになれるのです。もう一つ、長年趣味として続けてきた民謡があったからうまく気持ちの切り替えができたのだと思います。

現在はアルバイトをしながら、休みの日には仲間と共に仮設団地で慰問活動を行っています。民謡によって皆さんに心の復興をもたらし、自分たちも元気になれる。本当に「芸は身を助ける」ということを実感させられています。

この大震災以来、日本全国、世界の国々からの多くのご支援、ご協力を頂いているお陰で私たちはこんなにも元気を取り戻すことができました。誠に、ありがとうございます。

## 『やぶつばき』と佐藤豊子さん追悼

〔山田〕

27

福士 博（69歳）

震災命日の3月11日がめぐって来ると思い出される人がいる。小さな歌文集『やぶつばき』を遺し、津波で逝った歌人の佐藤豊子さんである。境田町に住み、カキ、ホタテの養殖を夫を助けて営んでいた。

出身は三陸町綾里である。『ふるさとケセン』という刊行物に寄稿したエッセー「ふる里は心の宝物」によれば、実家は人里離れた山奥にあったが、海は遠くなく、波の音を聞きながら育ったという。両親は農業と漁業で生計を立てた。

歌歴は平成8年山田短歌会入会に始まる。57歳の晩学である。故浜村半蔵氏に師事した。きびしく、忙しい浜の仕事に勤みつつも、老後を心豊かに、と考えたのだった。

花を愛し、自宅の1坪ほどの庭に山野草を植えて楽しんだ。春蘭、雪割草、片栗、一輪草、延齡草などが日々の暮らしに潤いを与えてくれることを小品「春を待つ庭」に記している。

岩手日報の「花時計」欄に掲載された随筆に「津波に消えた花壇」がある。漁協婦人部の花いっぱい運動に共感して、佐藤さんは海岸の空き地に7年もの歳月をかけて花壇を作った。海岸を往来する人々の憩いの場はしかし、平成6年10月4日の北海道東方沖地震の津波で流されてしまった。山田湾のカキ、ホタテの被害は6億7百万円余りにのぼった。

七年の歳月かけし花畑も波にのまれてあとかたもなし

一輪のナデシコにさえ命ありいとしい花よ波の彼方に

無念の思いを歌に詠み、文に綴ったところ二戸市の主婦の方から何十種もの花の苗が送られてきた。その苗をもとに佐藤さんは花壇を復活させた。そして、よみがえった花壇への感銘をまと

め、県の「余暇に親しみ余暇に学ぶ」作文コンクールに応募し、県知事賞の栄に浴す。その花壇も3・11の津波で、佐藤さんと共にあえなく没した。

『やぶつばき』の歌の特色は漁家諷詠にある。次に引く歌はそれが顕著である。

干潮の岩場に下りてまつも採る立春の波指につめたし  
海水を殻いっぱいを含みたるオレンジ色の旬のホヤ剥く  
殻閉ざし北の海より運ばれし帆立の稚貝は水槽に飛ぶ  
力込め殻付きの牡蠣<sup>かき</sup>砕く度化粧せし顔に泥の跳ね飛ぶ  
幾度か歌に詠まれし磯島のひじき刈る手に陽射春めく

震災前の漁家の生活の風景がいきいきと詠まれている。題材は、まつも、ホヤ、ホタテ、カキ、ひじきである。海のみぐみに対する感謝の心が素朴な言葉遣いの中にこめられている。歌の道に志し、浜の暮らしを写生的に詠うようになって、水産生物への愛情が佐藤さんは一段と増したようである。書こうと身構えたとき、精神の集中は高まり、対象の中へ人は深く入って行くことができる。

しかし、漁家の朝は早く、労働はきつい。毎日生きることに追われる中で、作歌に励むことがいかに困難だったか、歌は示している。

牡蠣殻の泥にまみれて剥きし夜は歌詠む気力失せて眠りぬ

書くことも読みたき本も数あれど浜の仕事に日々を追われし

歌文集の書名には、ふるさとへの著者の深き想いがある。三陸町綾里の実家には、家を囲むように椿の太木が何十本もあり、寒中でも花が咲き、実をたくさんつけた。母堂は油屋で絞り、バスや列車を乗り継ぎ山田まで持って来てくれたという。

今、綾里には誰もいない。山里に椿だけが咲いているだろう。思い出を心の奥に大切にしておきたい、と生前語っていた。御蔵山<sup>おくくらやま</sup>の下、びはんスーパールの近くにピアノ教師故木下登代子さんの家があった。津波で家は流され、椿のみ残った。春、わずかに面影をとどめる玄関脇の椿に花が咲く。その光景が佐藤さんの望郷の思いに重なる。

「ふる里は心の宝物」に印象に残る一節がある。旧正月5日、綾里集落における権現様の悪魔払いの行事を描いたくだりである。

その日、早朝母や姉がごちそうを作る。赤飯、煮しめ、うどん等大きな鍋が並ぶ。部落の若い衆が権現様の頭を担いで峠を越えて来る。子供たちは待ち切れず迎えに行く。太鼓の音がすると、峠の上から家に向かい「ゴンゲンサマが来たよー」と叫ぶ。急いでお膳の仕度をする。若い衆は台所から座敷と悪魔を払い、家族の頭をパクパク挟んで終わる。かくも胸おどる行事によ

り、人はふるさとへの愛着を強くする。

『やぶつばき』出版後佐藤さんは、何年後かに2冊目の歌集を編みたいと語っていた。志半ばに旅立った生涯が惜しまれてならない。

## 社屋3階に上って助かる

〔山田〕

28

前川良子（59歳）

まだ寒かったあの日、私は、山田湾が目前に広がる勤務先の水産加工会社の2階事務室でパソコンの前に座り、いつものように事務処理作業を進めていました。

事務室の窓からは山田湾の絶景が一望でき、遠方から初めて来社されるお客様は、その景色に感動してしばし窓から眺め続ける――。それが日常でした。その日も東京から商談で来たお客様がいました。2時ごろに商談が終わり、盛岡行き急行バスで帰るお客様の送迎をして、事務所のみんなは何となく一息ついたような雰囲気だった記憶があります。

突然大きな揺れを感じたのは、その少し後のことです。今までに経験したことがないような激しい揺れに気が動転して、どうしたらよいか考えも浮かばず、取りあえず近くの接客カウンターにしがみつき、揺れが収まるのを待ちました。

揺れはなかなか収まりません。頭の中は何も考えることができず、真っ白の状態でした。やっと揺れが収まって辺りを見渡すと、色々な物が散乱して大変な状況でした。間もなく防災無線の放送が聞こえて、津波警報が出たことが分かりました。

海のすぐそばの会社であり、社内では折に触れて津波の時の対策は話していました。それなのに、いざという肝心のあの時はなぜか、すぐに避難しようという考えが全く浮かばなかったのです。

事務所員の責任として、散乱した物を全員で少し掃除してパソコンの電源を切ったり、書類を整理したりと、業務終了の準備をしました。

そのうちに家や家族が心配で、誰からともなく避難しようということになりました。ところで、事務所には高齢で少し足の弱い人がいました。この人を守りながら、ゆっくり山田町役場へ避難しようということになり、1階の玄関を出て会社の脇を国道の方へ向かいました。しかし、その時は既に排水溝から水が噴き出し、道路は冠水し始めていました。

すると、近くにいた誰かが「役場まで避難しては間に合わないから、会社の高い所へ上がろう」と叫んだのです。その声に従い、すぐに会社の中へ逃げ込みました。ところが、私は当時それほど危険な状況かを考えもせず、いったん2階の事務室の窓へ海の様子を見に近づいてしまったのです。それと同時に、押し寄せた津波が市場の護岸を越え、さらに会社の前の防波堤を乗り越え、滝のように流れ落ちるのを目撃しました。

ぼうぜんとしていた私に、先に3階へ避難していた人たちが「早く3階へ逃げて！」と叫ぶのが聞こえてわれに帰り、慌てて3階の部屋へ逃げ込む途中に轟音が響き渡り、建物が大きく揺れました。会社の建物の1階から2階の一部分を津波が破壊して、通り抜けた音でした。慌てて駆け込んだる階の部屋で、町内を見渡せる窓から津波が町中に流れ込む様子が見えました。やがて引き波に変わった時、津波に流されていく人を目撃しましたが、どうすることもできませんでした。津波はどの辺りまで行ったのだろうか？ さっきの人はどうなったのだろうか？ 助かっていればいいけれど。そんなことを思っていました。

家族は無事に避難しただろうか？ 地震の直前に帰ったお客様は無事だろうか？ バスの出発時刻から推測すれば宮古は過ぎただろう。それならきつと大丈夫。震えながら頭の中に色々な事が浮かび、しばらく放心状態でした。津波は収まってきたようでしたが、辺りは薄暗くなり、建物は下半分が破壊され、鉄骨がむき出しで階段もなく、下に降りることが困難でした。3階に避難した全員でその晩はとどまり、あくる日、明るくなってから脱出しようということになりました。

しばらくすると、線路の向こう側2カ所で火の手が上がったのが見えました。火はどんどん大きくなり、爆発音が聞こえて火柱が上がリ、とても現実の事とは思えませんでした。夜半、自分たちのいる建物に火の粉がだんだん飛んで来るようになりました。ここにも延焼の恐れがあると、暗闇の中、リーダーの男性の判断で再び避難することになりました。

懐中電灯を頼りに、男性たちの手助けでむき出しになった鉄骨にすがりつき、時間をかけて何とか全員が無事に3階から下へ降りることができました。降りたといってもがれきの山です。歩ける場所などなく、手探り足探りではうように、境田から山田中学校を目指して一列になって進みました。国道もがれきの山でしたが、織笠との境界の頂上付近で、ここから町民グラウンドへ上れる場所があると言う男性を先頭に、やつとの思いで避難することができました。

もし最初の避難の時、引き返さずに避難を強行していたら、きつと途中で津波に流されていたでしょう。足の弱い人がいたことが、みんなの命を結果的に助けたのだと、避難所で話し合いました。

## 父と兄を追想して

〔山田〕

29

牛乳販売店経営 三田地智之（40歳）

東日本大震災では、お世話になっていた方々が、多数犠牲になりました。皆さんのことを忘れることはありません。あらためて心よりご冥福をお祈り申し上げます。

あの日のことを振り返ってみたいと思います。私は日中の牛乳配達の中でした。担当している豊間根地区を終えて、田名部なぶから関谷方面に続く道の途中で車を止めて、時間調整の意

味もあり、少し休憩をしておりました。すると、大きく長い時間の地震の揺れを感じました。目の前の杉の木々が左右に大きく振られて、地面が割れてしまうのではないかと不安の中、自宅で留守番をしている父に連絡を取りましたが、既に携帯電話はつながりませんでした。その場を離れ、車を走らせながら、これからどうすべきか非常に迷いました。いったん境田町の自宅に帰って、また仕事のために関口・関谷まで戻ってくるのも面倒な気がしましたので、配達を一通り終えてしまおうと考えました。

今思うと、この判断が正しかったのかどうか確信が持てません。仕事を中断して一目散に自宅に戻ったならば、自宅兼事務所と一緒に津波に流される直前の父に一声かけることができて、高台に逃げ切ることができたのではないか。否、戻る途中に、自分自身も車ごと津波にのみ込まれてしまったかもしれない。父には申し訳ないが妥当な判断だったのではないか。当時を振り返るたびに、永遠の謎である二つの可能性の狭間でため息をついております。

震災直後はお客様の安否確認が仕事になりました。父が見つからない状況の中で、自宅跡地周辺のがれき撤去の作業の傍ら、豊間根に設けられた遺体安置所に向いて、身元不明者に関するリストの中から父を探し出す作業を、兄と交代で進めておりました。

ある日、遺体安置所に張り出された不明者の写真を確認していたところ、顔がすっかり黒焦げになった写真を発見しました。輪郭が父に似ている気はしましたが、確信は持てず、いったん帰ってがれき撤去をしている兄に伝え、確認してもらうことにしました。数十分後、兄から連絡

を受けました。「あの写真は、やっぱりお父ちゃんだった……」。私が発見した人物こそ、父の最期の姿でした。震災から約1カ月後の出来事でした。

「お母ちゃんが3年前に亡くなって、今度はお父ちゃん。まさかこんなに早く親がいなくなるとは思わなかったがな……」

数日経って、がれき撤去の作業の手を休めて、荒れ果てた町を見渡しながらつぶやいた兄の言葉が今でも忘れられません。その兄自身も、震災の翌年に復興への道半ばにして、急逝してしまいました。45歳でした。

震災後の食料や水が不足していた時期、兄は宅配商品として使用できなくなった牛乳等をかき集めて、メーカー側から支援していただいたものと一緒に、あちこちの避難所に救援物資として届ける作業をしばらくの間、続けておりました。私は身の回りのことで精いっぱいでしたが、兄は自分たちの生活のほか事業の再建に向けて、あちこちの取引先や従業員、客への対応に追われ、大変だったと思います。

それから約1年半後に急逝した際、まるで「目に見えない津波の第3波」に兄が時間差で襲われてしまったような感覚が自分にはありました。兄とは普段けんかばかりで会話の数も少なかったのですが、不在はいまだに信じられないのです。「兄貴こそが店の復興の立役者であり、兄貴を慕う人達のためにもずっと生きるべきだった」と兄が自ら仮設に設置した、小さな仏壇の遺影に向かって兄に対して嘆きたくなるときもあります。

現在、私はその仮設住宅に住んでおります。当初私自身は震災後の状況に不安を感じ、地元を離れ東京で仕事に就いていました。外側から家業に協力できる人間になろうという目標を立てて、勉強しておりました。しかし、事態は急展開し、急きよ山田に帰省して、家業を継承しております。兄の了解を得て上京していたとはいえ、兄に負担をかけてしまったことは事実であり責任を感じております。

「絆」「つながり」。震災以降、この言葉が浸透しました。両親の現役時代からずっとお世話になっているお客様との濃密な関係を思うと、事業の基盤として大切にしなければならぬ言葉だと思っております。

まだ震災からのダメージを完全に克服できてはおりません。両親や兄が長い年月築き上げてきたお客様との縁を無駄にせず、献身的な従業員の皆さん、温かく見守ってくれた取引先の方々、そして何より自分たちの事業や生活をずっと支えていただいているお客様方からの励ましの言葉や日頃の多大なるご愛顧に対する感謝の気持ちを決して忘れることなく、いつかご恩返しをさせていただきます。これからの粛々と生きてまいりたいと思います。

## お金で買えぬ宝物を得た

〔山田〕

30

湊 三代子（75歳）

あの日は家にいてうたた寝をした瞬間、轟音と共に激しい震動が長々と続いた。棚から落ちる食器類や鍋などに何一つ行動できず、瞬時に耳をふさぎ、うずくまってしまった。

役場から津波情報が流れた。その物騒さの中で、鮭の稚魚に餌やりに行った主人のことが脳裏をよぎった。関口川の下流近くの孵化場は極めて危険な場所だ。

足がガクガクし、おぼつかない足取りで避難所へ向かった。北浜自治会の避難訓練はモデル地区に指定されるほど随時行われていたが、津波は想像を絶する規模で襲って来た。

指定避難場所に着かないうちに、波はがれきと共に押し寄せて来た。途中、50代ぐらいの女性が全身に水を浴び、裸足でうめきながら流浪していた。お父様が家の中から波にさらわれたことを後で知り、深い悲しみが伝わってきた。

津波は合わせて800人余りの尊い命を一瞬にして奪ってしまった。家屋の全壊、半壊は世帯数の半数に及んだ。わが家も築後4年半しかたっていない。そこから避難するには、途中で大きな側溝を横切らなくてはならない。あの時、何分か遅れていたら水流に逆らえず、命尽きていたかもしれない。紙一重だった。登り着いたら八幡神社の境内だった。みぞれ交じりの冷たい空

気の中で夕方を迎えた。役場から1枚を2人で使ってくださいと、毛布が配られた。避難者の中には赤ちゃんや老人もいた。数が少ないのに気付き、私は遠慮した。

周りは薄暗くなり、保健センターへ入ってくださいとの指示で中へ入った。町内は停電していた。火災も発生した。ガラスが一面に張られた1階の窓際に立ち、火事現場を見ていた。燃え広がる大きな炎におびえ、どうすることもできなかった。間もなく窓際と電灯の下から離れてくださいと言われた。それも束の間、今度は公民館へ移るように指示された。保健センターには次々と遺体が運ばれて、ブルーのシートで覆われていた。私はシートの中が気になり、移動をためらって後ずさった。九死に一生の、わずかな一を信じていたはずなのに、このシートの中に主人がいるかもしれないと思うと全身がざわめいた。

遅れて名前を記して公民館の中へ入ったが、今度は自衛隊の車で豊間根中学校へ移った。役場の人が10人ぐらいでグループを作り、班長を選ぶようにと言う。グループにおにぎりを配る役目である。

私の傍らに主人がいないのに気付いた息子の友達が「父さんは？」と聞く。「孵化場から帰らないから死んだかもしれない」と答える。彼は翌12日、山田に行って主人を捜し当て、夜に豊間根中へ連れて来てくれた。その時、名前を書かずに入ったらしい。盛岡近郊の親戚たちは各避難所を探して「オンサン（おじさん）の名前がなくて（なくて）ドデンすたー（動転した）」。入院してでも生きてればええどもったじゃー（入院していても生きていればいいと思った）。こんな

訛りに目頭が熱くなった。

13日の朝、与えられたおにぎりを食べていたら、今度は娘の友達がにおにぎりを携えて来て私たちの生存を涙して喜んでくれた。前後して宮古の義姪がお風呂を使わせるために迎えに来てくれた。震災直後はぜいたくなことだった。その晩、食卓狭しと並べられたごちそうは特別おいしく、明日への活力となった。

翌日、姪に宮古の姉の家へ送ってもらった。姉は私たちの安否確認のため、タクシーに米を積んで泣きながら私の友達の家々を訪ね回ったが、分らず、帰ったばかりだった。「お世話になってもいいか」と尋ねると、義兄は無事を喜び、快く受け入れてくれた。姉の家に身を寄せていることを知った親戚や友達から、お見舞いの金品や食料がたくさん届いた。いい友達に恵まれたことと、神様が残してくれた命に感謝した。

姉の家の温かい空気に包まれた安堵感から後回しになっていたが、主人に「帰れなかった11日はどこにいたの」と聞いてみた。しかし、口をつぐんだままだった。がれきをかき分けて私を捜していたと、その場を通りかかったという人から後で聞いた。些細な事で常に口げんかの多い夫婦なのに、そんな一面も持ち合わせていたんだと知ることができた。

震災で生活する術は失ったが、それより得た物も大きい。絆、感謝、忍耐、節約は、お金では買えない宝物だと思う。このことを今後の生活の糧にしたい。

葉漬けの老人2人だけど、支え合いながら撰生して天寿を全うしたいと思っている。

さだめなき浮き世の流れに友もまた誘われて行く今ぞ悲しき

## 生き地獄と化した故郷

〔山田〕

31

不動産賃貸業 本宿一夫（71歳）

私は山田町境田に生を受けました。両親は短命で、高卒後に家業（小売業）を引き継ぎました。家業のかたわら、若い時に約10年間運送業にも従事し、東北・関東に山田港名産の冷凍イカ刺身を搬送したものです。利益を得て、念願の家を27歳で新築しました。その間、町内4カ所にアパートを所有し経営者になりました。津波体験について言うと、昭和35年のチリ地震津波、43年の十勝沖地震津波に遭遇しました。この2度の津波は大した被害もなく、津波とはこの程度のものと思い、時代と共に立派な堤防ができたことにより、備えは万全だと沿岸に住む人々に安心感が生まれ、現代の繁栄を享受していました。

油断大敵、巨大地震の前兆か、平成23年3月9日、津波注意報が出る地震がありました。大きな被害が出ずに済みました。その2日後、マグニチュード9・0という巨大地震が発生し、約30分後に太平洋岸に大津波が襲来したのです。

あの日、私は少し遅い昼食を終え、わが家のこたつでうたた寝をしていました。突如襲った轟音、寝ていた枕を蹴飛ばされた感じで飛び起きました。ゴーゴー、ゴーゴー。強烈な地震で立っていることができず、サイドボードの角にしがみついています。一度は止まりかけましたが、また、ガタガタ、ゴーゴーと3分間くらい続いてやまと収まり、物は落ちるやら、ひどいありさま。でも天井は落ちませんでした。大変だ！これはただごとではない！今度こそ、とてつもない大津波が来る！今までのような半端な物でない！動物的な直感があり、表に飛び出して犬小屋と国道を見ました。不思議な事にこの家も倒壊せずにそのまま立っています。

海岸の防潮堤に走って行き、あの大型門扉に飛びついて閉めようとしたが、いかんせん1人の力で動く物ではありません。消防団が来て閉めるだろうと急いで家に戻りましたが、金庫のドアを開け、最小限度のお金を生き延びるためにとかばんに入れ、防寒衣、厚い靴下、長靴、皮手袋などで身を固め、物事が長期戦になる、だから備えだけはしっかりせねばと冷静に自分に命じました。表に出たら、「3メートルの津波が予想される」と2度ほど町の放送がありました。「大した事ないのか」と受け取ったのは自分だけではないでしょう。私の直感では10メートル強の津波が来る、だから逃げるべきだと思ったのです。犬も連れて行こうと犬小屋を見たが犬はいませんでした。いつもこの時間帯は向かいの姉が散歩に連れて行くから、犬は姉と共にどこかで難を逃れて生き延びているだろうと判断しました。

国道の車の流れを見て、新車で一目散に指定避難所の高台の「三田地団地」を目指しました。

最初はそこに車を置きましたが、もう少し高いさらに安全な場所へ移動。結果、私の取った行動は全て水と火の難から逃れていました。そうこうしているうちに三々五々人々が集まってきました。30人ぐらいが一樣に顔を見合わせ、「津波は来るのだろうか」と不安に駆られていました。約30分経過、海に異変が生じました。魚市場前の灯台のある船だまり近辺の海水が引き出したのです。引き潮だ、どこまで引くのだろう——。幼い時に古老たちから聞いた言い伝え「津波が来るときは大島近くまで潮が引き、それから大きな口を開けて襲ってくるものだ」が正しいかどうか見ておこうと思いました。ところが、灯台の根元が見えた程度で引きは止まり、はるか沖の方から一直線の白い渦巻きの束が見え、大浦方面に襲いかかって大島の辺りを越えました。大きな、大きな白い麻縄のようで、浦の浜方面が太く、大沢方面は細く、野球のバットをスイングしたような感じで、ものの3〜5秒で織笠、細浦に襲いかかりました。バリバリと細浦を壊す音が聞こえ、1〜2秒で山田郵便局の所の6メートルの防潮堤を軽々と越えました。営々と築かれたわが山田の町並み、境田地区、川向地区を押し流してしまいました。わが家はどうなっただろうと、見え隠れする自宅の方向にばかり目が行き、ただそれだけの数十分でした。

強大なエネルギーの大津波。止めどなく大洋から押し寄せて来る海水が黒っぽい波となり、部分的に破壊された防潮堤からどっと町に流入しました。この強大な第2波で山田町は壊滅しました。高台から見た惨状。現実か、夢か、幻か、ただあ然とするのみでした。誰かが「これで山田も終わったあ」と言い、肩を落しました。私も同感でした。後日の報道では千年に一度の大津波

だったということです。気を取り直して近辺を見回っていると、誰かの声で「人がいる、助けてほしい」と。誰かれ構わず4人を助けました。

打ち続く余震で、電柱が倒れるのかと思うほどでした。やがて旧山田病院近くと中央町付近から火の手が上がり、手の付けようがないままわが家、第4アパートと思われる所のガスボンベに火が回り、空中高く舞い上がる様はまるで地獄の始まりと見え、三日三晩燃え尽くし、廃墟の町と化したのです。この年で、想定外の大津波に襲われても逃げ切り、大火災も見、正にこの世で生き地獄を体験しました。終生忘れ得ぬ出来事。東日本大震災の犠牲者は2万人強、山田町だけでも800余人、その中には私の姉夫婦も含まれています。津波は沿岸に住む者の宿命とはいえ、二度とこのような大災害にならない町づくり、復興に官民挙げて立ち上がり、前進することを願って体験記を終わります。

結びに犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、鎮魂の言葉とさせていただきます。

## 1、2秒差で助かった

〔山田〕

32

山根和子（70歳）

2度目の大きな揺れが収まった時、これは異常だと思ったが、夫婦で割れたコップを集めてい

た。私たちは旧山田病院の前で民宿を営み、自衛隊（航空自衛隊三沢基地山田分屯基地）に1部屋と駐車場を貸して仕事をしていた。あの日は隊の若者3人のお客様がいた。当直さん、ドライパーさん、その他数人が自衛隊の青バス（人員輸送車）の所に集まり、怖かったねと話していた。自衛隊から「官舎に行け」と無線が入ったのを耳にした。3人の若者たちの乗ったバスが出る時、官舎に行っている旨の伝言を〇〇君に頼まれ、夫婦して外にいた。伝言もして、ホツとして車に乗り、ラジオのスイッチを入れた。「釜石に津波」というニュースが聞こえた。その時、クリーニング店の若旦那さんが後ろを振り返りながら小走りに目の前を通った。

夫の後ろをついて海の方を見に行く。周囲はしんとしている。この静寂は何なんだろうと思う。その時、夫の口から「えっ、あれ何？ えっ、津波？」と小声のつぶやきを聞く。見ると、近藤先生（医師）の自宅の前を、2階くらいの高さの波が大きな壁を作り、がれきと共にゆっくりに迫って来た。夫は私の手を取って走った。私が携帯電話を玄関の方に投げると、振り向きざまに目に飛び込んできたのは、御蔵山おくらやまの方向からすごい速さで流れてくる、大きく、真っ白い津波だった。走っていたら、後ろで「ドカン」。すごい音だった。海からの波と、御蔵山方向からの波が、農協の所でぶつかったなと思った。でも逃げた。途中、私が転んだので、夫は戻り、手を取った。阿部クリーニング店の前辺りで、電柱がボタン、ボタンと倒れるのを夫は目にしたという。

走っても、走っても、旧山田病院に着かない。もうちょっとだと思ったら、足元に波が来た。

その波を踏みつけながら、手を引かれるまま懸命に逃げる。気が付いたら八幡宮にいた。ホツとして、助かったんだと思う。大勢の人たちと一緒にうれしかった。

余震が続き、また揺れた。夫は町並みを見に行った。「理容バロンさんの所でがれきが止まっていたたぞ。助かったのは1秒、2秒の差だぞ」と言う。本当にそうだと思う。波と波がぶつかり、波の方向が変わったことも影響したのだと自分なりに思っている。火災の煙も見え、早く消してと願っていた。

夕方寒くなり、中央コミュニティーセンターに入れてもらう。着の身着のままでも、ホツとして暖かく感じたが、だんだん寒くなってきた。そのうちストーブに火が入り、ありがたかった。何がどうなってここにいるのかを考えていた。暗くなるのに電気もつかない。外の火災で部屋が時々明るくなり、避難してきた人たちの顔が見えたり見えなくなったりする。そのうち、ドーン、バーンと花火大会のときよりすごい音がする。おにぎりを頂き、口にする。あの状況の中、食べさせてくれた人たちに感謝している。

ホツとする間もなく役場に火が迫る。豊間根に行くよう指示された。いとこが山越えし盛岡から来てくれていて、高台に車を置いてある。そこまで歩いて近所の方と豊間根中学校へ移動する。毛布を頂き、運動用のマットの上に座り、早く朝が来ればいいねと、誰彼ともなく話す。朝、明るくなり見えてきたのは、暗幕にくるまっっている人たち。暗幕を外していたのは目に入っていたのに、忘れていた。いつの間にか、こんなに大勢集まっていたんだ。少し冷静になって、

いろいろ考える。逃げることを忘れた私たち夫婦……。くやしい。車に乗ってなぜラジオのスイッチを入れたのか。そのまま逃げれば波に追われることはなかったのに、と反省。

海は大好き。でも今は少し怖い。「あの時、どうして大暴れしたの？」と海を見て問い掛ける。避難所、仮設住宅、皆様のおかげで生きている。全てに感謝。ありがとうと言いたい。

## 信頼される地域警察官に

〔山田〕

33

宮古警察署、巡査 熊谷啓延ひろのぶ（25歳）

山田町内では仮設の商店街が建設されるなど、復興に向けた活動が続いています。しかし、町内は瓦礫がれきこそ片付いたものの、震災の影響が今も色濃く残っています。当時を振り返り感じることがあります。それは非常時こそ、警察官は最も頼りにされる存在だということです。

震災発生当日、山田町は津波と火災により壊滅的な状態となりました。

交番所員も被災し、救助資機材が流出した状況下での活動を強いられました。住民は皆自分の事で精いっぱい状況であり、他人を助ける余裕がある人はいませんでした。そんな中、警察官は住民が頼りにできる数少ない存在でした。要望は多岐にわたり、救助活動や負傷者の応急手当て、避難所警戒等、あらゆる活動が求められました。

そのような活動の中、倒壊家屋から女性を救助したことがありました。女性は津波で倒壊した家屋内に閉じ込められ、身動きも取れず、ずっと助けを求めています。その声を聞いた私たちは直ちに救助しようと思いました。それには相当な機材と人員が必要な状況でした。

そこで、「翌日には必ず助けに来る」旨を女性に告げ、その場を離れました。しかし日が暮れると、町内の火災が予想より勢いを増し、閉じ込められている家屋への延焼が確実な状況となりました。私たちは女性を救出するため役場からのこぎりを借り、再度現場へ向かいました。家屋の柱を切断し中へ入る必要がありましたが、延焼する前に救出できるかは分からない状況でした。2人で数十分間柱を切断していると、火災が付近に迫り、自分たちも危険な状況となりました。退避しなければならぬとの思いが強くなりましたが、私たち警察官の助けを求める女性をそのままにはできませんでした。

作業を続け、ようやく進入できる隙間を確保し、なんとか救出することができました。今回救出が成功したのは、女性が最後まで私たち警察官を信頼してくれたからだと思えます。信頼があったからこそ、それに応えようと自分たちも諦めなかったのだと思えます。

自分はこの経験を通じ、あらためて住民との信頼関係が大切であると感じました。女性は顔も分からない自分たちを、警察官というだけで最後まで信頼し耐え抜いてくれました。地域住民との信頼関係は、日々の地道な活動でのみ構築することができると思います。

地域警察官は、最も地域に密着し活動できる警察官です。地道な活動を続け、地域住民から信

頼される警察官になることこそが大切であると、震災を通じて強く感じています。

「使命 証言・岩手県警察の3・11」

## 一人でも多く救助する

〔山田〕

34

宮古警察署、巡査長 鈴木隆晃（26歳）

署内異動の内示を受け、山田交番裏の官舎で引越し作業中だった。平成23年3月11日午後2時46分、ゴゴゴツという音とともに大きな地震が発生した。

これまで経験したことのない縦揺れや、官舎がきしむ音に「ただごとではない」と思い、すぐに山田交番に向かった。

棚から書類が落ち、床には割れた食器が散乱、室内は消灯していた。私が1年間勤務し、慣れ親しんだ普段の交番の姿はなかった。

このとき既に交番前の信号機は滅灯し、一体どれだけの被害が生じるのだろうか、不安に駆られた。これが私の東日本大震災の始まりであった。

他の交番勤務員も参集したことから、山田町役場での情報収集、防潮堤からの潮位確認とパトカーによる避難誘導、交番内における情報集約の4班に任務分担し、私は先輩とともにパトカー

による避難誘導にあたることとなった。

町内の防災無線では「大津波警報発令」を知らせる広報が流れたため、私たちは急いで巡回連絡簿などを1階から2階に上げた後、各自の任務に従事した。私は私服の上に事故処理コートを羽織り、活動帽をかぶってパトカーに乗り、交番から国道45号沿線を重点に「大津波警報が発令されました。急いで高台に避難してください」と広報を実施した。

しかし前々日の地震の影響から防潮堤上にとどまり、海の様子を眺める人や写真撮影するなど避難する素振りを見せない人もいた。私は「何とか避難してくれ」との思いを込め、拡声器を通じて精いっぱい叫び続けた。「道の駅やまだ」まで広報を実施し町内に向かって反転したところ、織笠大橋南側にいた住民が「津波が来た」と叫びながら、慌てて国道を走り上がってきた。

詳細までうかがい知ることができなかったが、その危機的状況に「一般車両を町内へ入れるわけにはいかない」と思い、私たちはその場にパトカーを止め交通規制を行った。

停止を求めた運転手は一樣に家族の安否を危惧し、「町内に家があるんです」「町内の様子はどうなっているんですか」といった悲痛な思いを口にした。私は何も答えることができず、ただただ「津波で通れません」としか言えなかった。

無線で現状報告をしようにも、沿岸各署からの「津波到達」を知らせる無線がひっきりなしに鳴り響き、無線を送ることさえできなかった。

辺りを見回すと、多くの避難者が集まり始め、「うわーっ、津波が来た」などの叫び声が聞こ

えた。海の様子を確認すると、南北からの津波が船越半島を襲っていた。南からの津波は瞬く間に船越公園をのみ込み、北からの津波は防潮堤をあっという間に越え、私の眼前で北と南からの津波がぶつかりあった。

きれいな山田の海は今や、不気味なほど漆黒の波に変貌し、家屋が倒壊する音、木材がぶつかり合う音が鳴り響いた。半島を襲った津波は、みるみるうちにその勢力を増し、向こう岸に見えていた老人ホーム（シーサイドカרו）に達するや、ついには建物のすべてを覆い隠してしまった。いったん波が引くと、老人ホームの屋根には数台の車が突き刺さり、建物は大きく損壊。老人ホーム入所者や職員の生存は絶望的に思われた。

その時だった。流出した一般住宅の屋根から「助けて」と救助を求める必死の叫び声が聞こえてきた。私はとっさに「何とかして助けなければ」と思い、パトカーに積載していたトラロープを手にしたが、相勤の先輩は火の手が上がる他の現場に向かっていたため、その場にいる警察官は私1人であった。不安を覚える一方、自分は困っている人を助けたいがために警察官になったという初心が頭をよぎり、「絶対にこの人を助ける」という思いが込み上げた。私はロープを手にし、付近に応援を求めると、一般の男性2人が私のもとに駆け寄り「俺たちも協力します」と言ってくれた。

住民とともに急な崖を駆け下り、声の方向に向かった。そこには流される家の屋根に必死にしがみ付く高齢女性の姿があり、今にも津波にのみ込まれそうだった。皆で「今、助けるからな」

と励ましの声を掛けるとともに、自分自身にも言い聞かせ、気持ちを鼓舞した。女性にトラロープを投げ届け、腰に巻きつけてもらうように指示した。固く結ばれたことを確認しロープを引っ張ったが波の流れが妨げとなつて、女性を引き寄せるのは困難を極めた。それでも声を掛け合い、力を合わせて救出に成功した。

女性は恐怖で青ざめ、体力は著しく低下し一步も動けない状況だった。安全な場所に移すため急斜面を登ることにしたが、衰弱は激しい。住民と再度協力しながら何とか急斜面を登り切り、避難させることができた。

「もう安心ですよ」と声を掛けると、その女性は疲れきった表情の中にも安堵した様子で「ありがとう。怖かった。生きているんですね」などと何度も感謝の言葉を口にした。

女性の目に浮かぶ涙と感謝の言葉に触れ、それまでの疲れが一気に吹き飛ぶと同時に、私は女性を住民に引き継ぎ相勤者が先行した現場に向かった。救助現場から数百メートル進むと、道路が冠水しており、それ以上の進行を阻んだ。相勤者も冠水で足を止められており、私たちは「一人でも多く救助する」という思いで山田町内に戻ろうと、迂回路となる自動車専用道路（山田道路）南口から北進した。

走行する車両内から町内を見下ろすと、JR山田線の線路は流され、家屋は倒壊し、至る所で火災が発生していた。立ち上る高さ約20メートルの火の手と黒煙。戦争映画でも見ているかのような惨状だった。

さらに進むと、自動車専用道路北口付近にある県立山田病院の1階は水没し、病院の屋上には助けを求める人たちが多数取り残されていた。今すぐ救助できる状況ではなく、役場を通じて救助へりを要請するしかなかった。

日没が近づく中で、取り残された方の不安な気持ちを少しでも解消したいという思いから、パトカーの回転灯を点灯し拡声器で声を掛けた。

私たちは、船越地区の避難者の人数を把握するため、再び自動車専用道路から火災で真っ赤に燃えている町内を見ながら船越地区に戻り、船越駐在所勤務員と合流した。避難所となった消防分団屯所や船越公民館では、薄暗い中で大勢の住民が肩を寄せ合いながら座っていた。私たちは避難者一人一人に声を掛け、安否を確認し、次の避難所に向かった。途中、津波の直撃した田の浜地区の船越湾漁協が遠目に爆発したように見え、何も出来ない自分が悔しかった。

震災2日目は、消防分団員と協力し、船越小学校の児童全員の避難誘導に従事した。児童たちは笑顔を振りまいていたが、「中には家族を亡くした児童もいるだろう」と思うと胸が張り裂けそうになった。

地震発生から3日目、荒廃と化した山田町内に戻ってきた。

燃え尽きた町並み、舞い上がる粉じん、焼け焦げた臭いに言葉が出なかった。

交番機能を移設した役場で、交番勤務員全員の無事が確認できた。防潮堤に行った同僚は避難者と共に波にのまれたが奇跡的に助かった。交番に残っていた先輩は津波を確認し、避難する際

に後方から津波が押し寄せ命からがら避難した。そうした話を聞き、あらためて津波の怖さに体が震えた。

受け持ちの飯岡、長崎地区は半分が焼失した。倒壊した家の中を、遺族が思い出の写真を一枚でも見つけたいと泣きながら探している姿には涙が止まらなかった。

震災から月日が流れ、国道45号は整備され、街中のがれきは片付き、山田町内にはプレハブの飲食店が建ち並んだ。一見すると復興したようにも思われるが、「また津波がきたら、どうしよう」「今後はどうやって生活していけば良いのだろう」などの被災した方々の言葉に象徴されるように、心の復興はまだ道半ばである。

東日本大震災警備に従事した警察官の一人として、この経験を後世に伝えていくことが、私に課せられた使命の一つであるとの気持ちを胸に、これからの警察官人生を歩んでいきたい。

「使命 証言・岩手県警察の3・11」

## 多くの「死」を乗り越えて

〔山田〕

35

宮古警察署、巡查長 吉田朋史<sup>ともかみ</sup> (26歳)

当日、私は山田町内の自宅で引っ越しの準備を進めていました。念願の交通機動隊に内示を受

け、異動に向けて心を弾ませている最中、未曾有の大震災が発生したのでした。

今まで経験したことのない大きく長い揺れは、非常事態であることを十分に物語っていました。直ちに制服に着替え交番へ向かうと、外では町の防災無線のサイレンが鳴り、「地震による大きな津波に警戒せよ」という広報が流れていました。

私に与えられた任務は山田湾の防潮堤で潮位変動の観測と報告、周辺住民の避難誘導でした。その際、上司から「いいか、何があっても海側には降りていくな。津波が来る前にすぐに逃げろよ」と強い口調で言われました。

隊内系無線を持って交番から飛び出すと、避難する住民の流れに逆らうように防潮堤の方へと走りました。防潮堤の上へ登り、山田湾を見渡すと、潮位が次第に引いていくのが分かりました。「岸壁際の海底が見えるくらい、潮位が引いています」。そう報告すると同時に、「本当に津波が来るんだ」と感じました。

私はすぐ「津波が来ます！ 逃げてください！」と海側に向かって叫びました。海側にはまだ数名の漁業関係者が作業をしたり、海を眺めたりしていました。

何度も叫んでも避難しない人もいました。そうしているうちに、それまで引いていた潮位が次第に上昇してくるのが分かり、私には焦りが生じてきました。

「近くまで行って誘導するしかない」と思い、上司の言葉に逆らい海側へ降りる階段を下り、一人一人に避難を呼びかけました。素直に従ってくれる人ばかりではありませんでしたが、強く

説得して避難させていきました。

そして、岸壁の端で作業をしていた最後の1人の漁師に避難を呼びかけた時、潮位は岸壁を上回ろうとしていました。私は強引にその人の手を引っ張り、防潮堤の方へと走りました。防潮堤まで約30メートルというところでした。鈍い「ガン」という音が立て続けに鳴ったかと思うと、ついに潮位は岸壁の高さを越えて来ました。波が越えて来たことで岸壁に係留していた船同士がぶつかり合っって音が鳴っているのです。その波に追われるように私たちは防潮堤へと駆け上がりました。

息を切らしながら、防潮堤の上から海側を見ると、波は既に平屋の作業小屋をのみ込み、小屋を覆うトタンの壁がきしむ音が響き渡っていました。

「このままでは防潮堤も越えてくるかもしれない」と不安が頭をよぎりました。直ちに防潮堤の上にはいた人たちに対し、高台に避難するように呼びかけました。私も最後に残った漁師の手を引っ張ったまま、防潮堤を陸側に降り、高台を目指して再び走り始めました。後方の防潮堤からは地鳴りのような音が聞こえ、それが急に大きくなった時でした。ついに波は防潮堤を越え、陸側へとあふれ出してきました。それはあつという間に私たちをのみ込みました。背後からの圧力を感じた瞬間、体の自由を奪われ、つないでいた漁師の手も離れてしまい、別々に流されていきました。

「死んだな……」、そう思いました。その後、一瞬記憶がなくなりました。

次に気がついたとき、私は勾配の急な坂道の途中に倒れていました。運の良いことに、私は家屋の間を縫うように一直線に坂道まで流され、全身までのみ込まれず、たいしたけがも負っていませんでした。

さきほどまで一緒にいた漁師の安否が気になりましたが、その確認ができる状況ではありませんでした。

防潮堤を越えた波は見慣れた町並みを流し、陸の上では船が走り、転覆を繰り返す。想像を絶する光景でした。

第2波、第3波が来てもおかしくない状況でした。私は周りにいた住民に対し、坂の頂上にある善慶寺まで避難するよう呼びかけました。足の不自由な高齢者を背負うなどしてほとんどの人の避難を済ませたはずでしたが、2、3人の人が波のすぐそばまで戻っていくのでした。すぐに追って話を聞くと、その人たちの家族が第1波襲来の際、家屋内に取り残され、安否が気になり戻ってきたとのことでした。

その家屋は1階部分のみ込まれた状態で、取り残された家族はその1階にいたはずだと言うのでした。「救助は任せて、あなたたちは寺まで避難してください。家の中には決して入って来ないでください」。そう言い残し、ガラスが破れた窓から家屋内に入っていました。

家屋内は家具や畳などがひっくり返り、泥や瓦礫がれきでいっぱいになっていました。私が呼びかけると奥の方からうめき声が聞こえてきました。無我夢中で家具や畳をどかしていくと、泥で真っ

黒になった男性が家具の下敷きになっていました。全身にけがを負っているのか動くことができません、まともに受け答えもできない状態でした。私はその男性を畳の上に引き上げ、その畳を瓦礫の上を滑らせるように押していき、家屋の外まで搬出。その後は一般の人の応援をもらい寺まで運びました。

ほっとすると同時に他の地域の状況が気になりました。私は津波の襲来を受けていない山側をまわって山田町役場へと向かいました。役場にたどり着き町を見渡すと、あつたはずの建物がなくなり、数カ所で火災が同時に発生していました。瓦礫が道路をふさぎ、消防も現場まで行くことができないのは明らかでした。山田交番も津波の襲来を受けたため、役場を拠点とすることになりました。

役場では要救助者の情報収集にあたり、現場で要救助者を救助、役場まで搬送という流れを终日繰り返しました。足が不自由な高齢者、津波の襲来を受けた負傷者、火災炎上中の家屋内に閉じ込められた人など、さまざまな人の救助活動に当たりました。

ろくな装備ありませんでしたが、同僚と励まし合いながら決して諦めることなく救助を続けました。ようやく救助要請が無くなったのは日付が変わった頃でした。味わったことのない疲労感に襲われ、役場の椅子に横たわりながら仮眠をとりました。

翌朝、町を見渡すとそこには見慣れた町並みはもうありません。火はまだくずぶり続け、至る所から黒煙が上がった町は、空襲を受けた後のようでした。明るくなったことで新たな要救助者

が見つかり、救助活動に当たりました。

その日の午後、役場にご遺体が収容されたので確認をしてほしいとの役場職員から知らせを受けました。今回の震災でご遺体に対面したのはそれが初めてでした。

そのご遺体というのは、4階建てのビルの屋上まで避難したが、迫り来る火の手から逃げることができず亡くなった若い母親でした。私は対面したとき、言葉を失いました。そのご遺体は火災により損傷がひどく、判別ができないほどであったにもかかわらず、確実にその両手で1、2歳になる我が子を抱いたままで亡くなっていったのでした。

その方の恐怖や無念さを思うと、助けられなかったことの悔しさや自分に対する無力感が大きくなり、私はただその場に立ち尽くし泣くことしかできませんでした。

その後は救助活動とご遺体の捜索活動に従事しました。他県から派遣された自衛隊の捜索部隊に山田交番から1人ずつ随行し、地理案内をしながら捜索活動を行いました。私は航空自衛隊の部隊に随行することとなり、約1カ月間、その体制が続きました。

捜索活動は常に危険が伴い、体力的にも精神的にも過酷なものでした。朝から夕方まで瓦礫の中を歩き続け、崩れてもおかしくない半倒壊の家屋やガス漏れしている家屋からご遺体を搬出することもありました。高齢の方もいれば幼い子どももあり、遺族が対面する場面に立ち会うたび、かける言葉もなく、ただご遺体に向かって手を合わせることでできませんでした。捜索から帰って来ると立つ気力もなく、翌日の捜索に備えることで精いっぱいでした。

そのうちに、自分自身が津波の襲来を受けた場所の捜索を行うことができました。自衛隊員からご遺体発見の報告を受け、確認すると見覚えのある男性が横たわっていました。その背格好や着衣から、私が手を引っ張って津波からともに逃げていた漁師だとすぐに分かりました。「どうしてあのとき……」と思うと、悔しさと自分だけ助かってしまった申し訳ない気持ちになり、あの時の手の感触がよみがえりました。

また次の日、同じ場所で捜索活動をしていると、私が流れ着いた場所で救助した男性の家族に会うことができました。私は「その後の容体はどうですか？」と尋ねました。その家族は私を見るなり明るい表情になったので、私は「元氣になりました」という回答が返ってくるものと期待していました。しかし、その家族の口から出た言葉は「あの後、息子は容体が悪くなり、その日の夜に亡くなりました」というものでした。

私は愕然とし全身から力が抜け、その場に膝から崩れ落ちました。どうしようもない脱力感に包まれました。しかし、さらに男性の家族はこのように続けました。「でも、あの時助けてもらったおかげで、息子と最後に言葉を交わすことができました。本当にありがとう」。私はその言葉に本当に救われました。

3月11日以降、多くの「死」を目の当たりにし、そのたびに無力感を感じ、私は心底沈んでいました。しかし、男性の家族が私にかけた言葉は、たとえ結果が報われなくても、あの時の行動が無駄ではなかったと私に教えてくれました。

# 大沢

[ Osawa ]

## 2

chapter 2

漁港に面した市街地はほぼ壊滅した  
(3月13日午前10時1分撮影)



その後も捜索活動の中で、ランドセルを背負ったまま亡くなった小学生、手をつないだまま亡くなった老夫婦、亡くなった我が子の泥を泣きながらぬぐう母親など出会い、悲しみが絶えることはありませんでした。それでも前向きに「一人でも多く、一日でも早く、家族のもとへご遺体をお返しする」という使命感で、あきらめず捜索活動を続けていきました。

6月の異動までの約3カ月間、無我夢中で走り続けました。我が身も津波に流され、家財のすべてを火災で失いました。それでも被災地での職務を全うできたのは、やはり警察官としての「誇りと使命感」があったからだと思います。

「『被災者』である前に『警察官』である」という警察官としての「誇り」が私を弱気にさせませんでした。

また、「使命感」に裏打ちされた行動は、たとえ結果が報われなくても、誰かを救うことにもなるということを知りました。

この未曾有の大震災を乗り越え、経験を糧に、復興に歩み出した被災地に安全と安心を与えられるよう邁進していきたいと強く思います。

「使命 証言・岩手県警察の3・11」